

土左日記創見

## 凡例

一、本書は、香川景樹著『土左日記創見』の翻刻である。なお、本書には、そのうち、「上之本」「上之末」を収める。

二、底本は奈良女子大学図書館所蔵本『土左日記創見』に拠るが、その書誌は次の通りである。

版本。五冊。白色表紙。四つ目袋綴。改装。縦25・9・横15・0 cmの大本。全冊、左肩に「土左日記創見」の薄青色刷の貼題箋がある。

なお、翻刻に当たっては原本の表記にできる限り従ったが、読みやすさを考慮して、次の通り本文を改めた。

(一) 濁点・句読点・「」・『』を私意に加えた。

(二) 旧仮名づかいはそのままとするが、漢字は現在通用の字体を使用した。

(三) ニノ字点は「々」とした。なお、文の始めに「々」がくる時は、(一)内に原字を注記した。

三、原本の丁移りは、「」をもって示した。

四、翻字並びに電子テキスト作成は、奈良女子大学大学院生の場合美帆が主として担当したが、成稿後、奈良女子大学文学部奥村悦三との場で数度にわたり慎重に校正を行い、誤りなきを期した。なお、その際、疑義のある箇所については、奥村が最終的な判断を下した。責は、奥村にある。

(表紙題箋)

『土左日記創見』

上之本

(見返し)

香川景樹大人著

土左日記創見全五冊

東塙塾蔵

## 序

承平中。紀土左守。任滿歸京。以文紀行。傳至於今。多箋釋者。概未得明晰。今文政己丑。香川長門介新作之解。而安藝民賴襄序之曰。嗚呼。此當時平常言語。于方土左守之紀之。豈料世有為之注解者。而吾與長門介皆生二八百年後。何知其解之果能得其意與否也。雖然。所紀者人事也。寧不可推知。按史。土左守以善歌稱。其為人不概見。然當是時南海盜賊方起。而得任此國。在任五六年矣。則其間勦賊護民。功績豈少。觀記所叙吏屬依戀之狀。可知知之矣。而歸裝中。無物可以答其意。則其清廉不營私又可知矣。數言賊之欲相報無它。嘗被勦討。故待解官權。而報復之也。道途艱虞如此。而纔到京郊。停山崎。累日者。舊宅荒廢。自經理之。乃能得歸。亦可見廉者之効矣。而其後官終於木工頭。位僅得進一階。蓋政在私家。俗貴門地。彼以儒流。孤立坎軻。其抑鬱為何如哉。而玩其文詞。優游恬易。出以諧謔。託之婦人之作。以自晦其功勞。而世故人情。每躍然於短詞之間。吾是以知其人物才量。不特善歌也。抑唯其人如此。故其歌如此。世之所謂歌人。々（人）自人。歌自歌。々（歌）與二人事一視為二兩途一土左守不然也。故此記以二

常語<sup>一</sup>。紀<sup>二</sup>常事<sup>一</sup>。往々舉<sup>二</sup>婢女童子柁師棹<sup>一</sup>郎。矢口諷誦長短不<sup>レ</sup>齊。而音節之諧自然成<sup>レ</sup>歌者<sup>一</sup>。豈非<sup>四</sup>以警<sup>三</sup>世士大夫以<sup>レ</sup>歌為<sup>レ</sup>歌刻意飾詞失<sup>二</sup>其本旨<sup>一</sup>也耶。其嘗撰<sup>二</sup>古今集<sup>一</sup>猶束<sup>二</sup>於官命<sup>一</sup>。不<sup>レ</sup>免<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>礙。故於<sup>二</sup>家乘<sup>一</sup>暢<sup>レ</sup>言之<sup>一</sup>。而集序所<sup>レ</sup>論。歌本<sup>二</sup>性情<sup>一</sup>詞成<sup>二</sup>萬殊<sup>一</sup>。鳥語蛙聲<sup>一</sup>誰為<sup>レ</sup>非<sup>レ</sup>歌者。已與<sup>二</sup>此旨<sup>一</sup>合焉。今長門介亦以<sup>レ</sup>善<sup>レ</sup>歌名震<sup>二</sup>一世<sup>一</sup>。吾察<sup>二</sup>知其心所<sup>一</sup>嚮乃在<sup>二</sup>於此<sup>一</sup>。所<sup>三</sup>以眷<sup>二</sup>々於注解<sup>一</sup>焉。而作<sup>レ</sup>解大旨。蓋亦不<sup>レ</sup>外<sup>二</sup>於此<sup>一</sup>。々（此）前注者之所<sup>二</sup>惑末<sup>一</sup>知而其實所<sup>レ</sup>謂萬世猶<sup>二</sup>旦暮<sup>一</sup>。不<sup>レ</sup>難<sup>レ</sup>知<sup>二</sup>其解<sup>一</sup>者。則八百年。何足<sup>レ</sup>言哉。襄儒生也。瞠<sup>二</sup>於歌<sup>一</sup>者。然土左守亦儒者。不<sup>レ</sup>可<sup>下</sup>專以<sup>二</sup>歌人<sup>一</sup>目<sup>上</sup>之。而長門介亦非<sup>二</sup>以<sup>レ</sup>歌為<sup>レ</sup>歌者<sup>一</sup>。所<sup>二</sup>以徵<sup>レ</sup>序而不<sup>レ</sup>辭也。」

いにし承平のとし、紀朝臣、土左の國の任はてゝ、帰らやとうたひし船跡、五十余日のほど、暫く女のわざとして書すさび給ひし此日記は、かの失れたる女子の哀情をやり給ひしひたすらのしわざなる事を、あざれの中に知人なく、「おほよそ只に風月の感を述給ふとし、或は、世の奢を諷諭し給ひしなど、己が向たるかたざまに思ひとりて、みだりに<sup>ホメ</sup>誉貴むめる。あたかも雲中の月をめづるに似たり。何の光をか見とめつらん。抑、この朝臣は、哥の聖なりとこそきゝ仰ぎたてまつれ、思はんや、」弓矢の道にもたけ給ひぬらんとは。智計を大津の湊<sup>ミナト</sup>にめぐらし、勇威を浦戸の波にふるひて、一世を轟かし給へる。是、はた、世々にしる人なきは、あたらしとも口惜からずや。こゝに吾、東塢<sup>ウシ</sup>の大人、明敏の眼をもて波底の月、水中の天とゝもに残る」限なく見頭はし給ひぬれば、やがて此書を創見とぞ名づけたりける。また、此日記や文章のいみじきなど、今更申さんは世の常也。何のあし陰もいで見えけん、ほやのつまのいずし、あるは齒がためならぬおし鮎の口に滑稽の味をきはめ、しかのみならず、「綱手引濱邊にひろひては、くだけし玉のなげきを集め、をつの柰原はるゞくなるにはうみたる旅の思ひをやり、或は渚の岡の柰風にさむき昔の声をかなしび、あるは月の中なる桂川の湍瀨にかはらぬ今のかげをよろこぶなど、みる物」きくものにつけて誠の限をいひ出給へる。さればこそ神の心の

あるゝ海に鏡をいれて、其しるしは見給ひつれ。大人、又いかなる人ぞや。とほく過ぬる波路のひゞきを、風のしらべに聞とりて、遙に古人のかなしびをかなしぶ。千世のむかしに紀氏ありてなくゝ是を」かけば、ちとせの今に大人出て、なくゝ是を注す。梁の塵をたゞよはせ、行なる雲をとゞめしはその世の聲にして、聞しるもかたからじ。ふりとふりにしむかしの涙、ふたゝび大人の袖にこぼれて、いまより後にきく人の袖よりそでに傳はれゝば、幾萬代の遠きに」流て、いかなるそでかはぬれかへらざらん、ひちとほらざらんやは。あなかしこ。

門人 平正澄しるす」



## 小引

『土佐日記』は、紀氏彼國の任解て、承平四年の冬帰洛の時に臨みて鍾愛の女子を失れたる其の歎きに堪かねて、ひそかに思ひをやり給へる書也。船中、帰路のすさみばかりは大やう記されんもさる物から、よに奇しき<sup>アヤ</sup>まで戯れ給へる、更に外の故<sup>タハ</sup>ならず、只これが為にふんでを立うへて、悲哀の情を盡されし物也。さるは女々しくも稚<sup>メ</sup>きわざなれば、やがて女の書りとし、多く童の言となす。さはひたすら其方に隠れんとはあらで、しどけなきあざれの中に、彼女々しくも稚<sup>ヲサナ</sup>き思ひを吐んと也。また、賊船の為に襲はれ漂ひしそこばく<sup>メ</sup>の日数を、残りなく風波のさはりに書流し、かつ其滑稽をいたさんまぎれに、人のうへをさへ褒貶せられて、かたぐし世に見ゆべき物ならねば、家にのみ秘め置れたらんほど、心のまゝにぞ撰み反し給ひけん。其文章の簡雅なる、意味の玄微なる、却て古今序の上に出て、尤天下の冠たるべし。されば此書の大むね、亡児の悲みを主とし、下に海賊の恐りをふみ、是をかすむるに全文俳諧をもてす。此三つの大事を遺して古来此日記を説来れるは、足を攘ひて鼎を置也。竟に其説たつ事なけん。

○當時、紀氏の年紀を考るに、まづ延喜六年、『古今集』撰録の時を、しばらく「四十五六歳と定む。

此事彼集に辨ぜり。されば、此承平五年帰洛の時は、七十三四歳なるべし。記中、「なゝそぢやそぢは海にある物也けり」とあるに叶へり。よりて、彼亡児は六十八九歳の時の子とす。然るを、古傳に撰集の時を卅三歳也といへるによりて、今を五十二歳とせるは受られず。」紀氏は寛平の后宮哥合の作者にして、彼哥合は寛平五年より前なる事、『菅家萬葉』によりて誰もしる所也。傳による時は、寛平元年は紀氏五歳の時に當れるをや。是ばかりにも不稽の説なるをしるべし。すべての委き事は、彼序註に記しおければ、こゝにもらせり。」

○此日記、妙壽院本、附注本の類ひ世に数本あるが中に、季吟法印の抄本を本文、注解ともに優れたるとす。譬へば、諸本の訛謬五分ならんには、抄本は二分なるべし。此故に是を本書とす。尤此本は京極黄門紀氏の自筆を寫し給へるといふによられたれば、大畧善本なるべきが、されど、「それはた古假字ならず、かつ衍字脱文もまゝ見え侍れば、「其原本紀氏の自筆也」といふも又疑ひを残すべきもの也。

## 土左日記

をとこもすといふ日記といふものを、をんなもしてこゝろみんなとてするなり。

「日記」は、日々の事をするせるの称ならん事、名義あきらかなるべし。「男もすといふ日記」としもこと更にいへるは、頓て男のせし事をほのめきて暗にあらはす也。次に、「女もして」といへるに、女ならざる事、猶しるし。たとへば、年ふりたらん人の、「おのれ若けれども老め」く也」といひ、酒このめるが、「下戸にはあれどのみつべし」など、ほゝゑみ興ずるに似て、実に若き人、実に下戸ならん、却てしかはいふべきにあらぬが如く、かまへてわざとうらうへをいへる、皆、女の女ならざるを見えしむるあざれ也。まこと女のさまに見えんとならば、中々、かく男女のうへをまうけ出べきならず。事ざまめゝしうなだらかに、いかにも有べし。さりとも、女はたえてさるわざすまじき物ならば「こそは、しかもことわり出め、女ならんからに日記かくまじきいはれなく、まして、こは限りある旅の船路のすさみにして、大やう誰ももだしてはえあるまじきわざ也。後にもてはやす『更科の日記』、『十六夜の日記』などいふも、みな女の紀行なるをや。これらのさきにも『蜻蛉の日記』あり、『紫式部の日記』あり。こは普く人のしる所也。此外にも、

女の日記といふもの挙るにいとまあらず。すなはち、式部のものせし『源氏』の明石の巻に、  
「やがて御有さまを日記のやうにかき給へり」など紫のうへを書なせるにも、女もそのほど／＼  
にまかせて、日記せし事のさま、見るにたれり。そのかみとても、事情猶しからざらんやは。さ  
れど、引とりては、男のかくべきも又あたれるまへのわざなれば、今はしばらく、さるかたによ  
りてかき出たりともいはんものから、猶「男のすといふなる日記といふもの」などうけばりては  
かゝず、「を」とこも」いひて、女もすべき物のさまを打かすめたるなど、とかくに書まがへて、  
畢竟しどけなきもの也。さはいへ、実に紀氏の日記なれば、其文意、文勢、尤をしく、しかも、  
大やう自記の舛裁なるを、みす／＼斯もいひなせるは、まこと女にかくれて物せんとはあらで、  
たゞかの思ふ心ありて也けり。かつ、この日記の打まかせて俳諧なる事は、まづ此發端の大とれ  
たる調にも聞しるべし。たとひ其意正しくとも、其しらべたはれたらんは、もとより俳諧也。  
今は、しらべも心もたはれたるをや。『古今』の序などの事がら正しきには打かはりて、さしもあ  
ざれくつがへりたる此記のすがたを、いにしへ今に見しる人なく、しひておほやけさまの実録に  
ときなさんとするより、杜撰附會の説のみにして、作者の本意千載にあらはれざるは、あたらし

きわざならずや。

それのとし、しはすのはつかあまりひとひの日のいぬ」のときにかどです。そのよしいさゝかにものにかきつく。

すべてをばもとよりの正記あらんにゆづりて、今は「それのとし」などおぼめきても書り。実は承平四年の冬也。さるに却て「井日あまり一日のひの戌の時に門出す」など、又委きに過て前後さらにひとしからず。かつ戌の時は初更也。さる夜陰にかどですと打まかせていへるも実さまならずや。「戌の時」などかゝずても有なんを、わざとしひてもいへる、みなあざれの外ならず。もし是を実記と見んには、御世の号はさら也、其年なみをだにしるさずは何の日記するかひあらん。よし語調のたはれたるを見しる事えあらずとも、かくことわりの乱れたるに心をつけずは有べからず。「そのよし」云々は其船中帰路の事を書つけ試むと也。これまでは、はしがきといふべし。

あるひと、あがたのよとせいつとせはてゝ、れいのごとど」もみなしをへて、げゆなどとりて、すむたちよりいでゝ、ふねにのるべきところへわたる。

「ある人」は記者の女紀氏をさしていへる也。大よそ「某年」、「某日」、また「或人」、「或説」などいふものは、しるきをわざといはざるにて、今も紀氏とも土佐國ともいはず、しどけなきは、例の也。「あがた」は、はやく縣主縣召の称さへ有て、大やう諸國の官府をさしていへりと聞ゆ。今もあがたの任限よとせ五とせといふ意也。又『古』今に、「あがた見にはえいでたゝじ」と書るは、「三河の國見物には」といふばかりの事と聞えて、そのかみつかひならせる世には大やういかにも用ひけん。「あがた」は、其本公田より出たる名ならん。もとより公田は、霖旱にあひても損傷なき、いはゆる高田<sup>タカタ</sup><sup>クホタ</sup><sup>ホタ</sup>の偏地にあらざる廣平の良田なるべし。さるは即ち、安田<sup>ヤスタ</sup>平田<sup>ヒラタ</sup>にして、皇神<sup>スメカミ</sup>皇君<sup>スミロミ</sup>のきこしめす御料ならんは更也。さるは、水口<sup>ミナクチ</sup>新嘗<sup>ニヒナヘ</sup>など殊さ<sup>アガ</sup>らに仕へまつりて崇まふより、上田<sup>アガタ</sup>といふべし。即ち、俗にいふ上田<sup>ジヤテン</sup>也。もとより「あがむる」「あがまへ」も、上様<sup>アガフルアガ</sup>上延<sup>ハ</sup>の音便にて、尊美の称なる事、論なし。山城の縣の井戸なども、いにしへ公田の井にて、わきて清泉なりしより名づけそめけん。さて、その任限は四年なれども、延長八年にくだりて、今年承平四年まで前後五年をかけたれば、ふさねて四とせ五とせといふ。「例のこと」は、國守交替の定まれる公務あるをいふ。」さるをなし終りて、官税等とゞこほりなくすめるよしの文書を後任

の人より受とるを、「解由をとる」といへり。すべて委しき事は、『令』『式』などにつきて見るべし。さて、住なれし館をば新守にゆづりて、まづ船中へうつる也。船場のほとりに飯のむろつみして、しばらくとゞまりをる事にやとも思ひしかど、然らず。後に、「船に乗そめし日より」といへるは、此井一日にあたれば、此日すでに乗うつりて、さて大津に船や」どりしてあられし也。「はてゝ」、「をへて」、「とりて」、「いでゝ」と、「て」文字をたゝみていへるは古文の常也。

かれこれ、しるしらぬ、おくりす。としごろよくぐしつる人々なん、わかたれがたく思ひて、しきりに、とかくしつゝのゝしるうちに夜ふけぬ。

しる人も見しらぬ人もかの船場までほどくにおくりすといへり。中にも、此年ごろめしつかはれてしたしく出入せし人々は、ふたゝび逢まじき別」れを惜みて、さがてにせし也。調度やうのもの、或は船につみはこび、かつ離盃などとりぐにまかなひさわぐを、「しきりにのゝしる」といふ。夜に入てうつられたれば、やがても更たるべし。「年ごろよく具しつる」とほこりていへるは、例のあざれ也。「わかたれがたく」は、諸本「わかれがたく」とあるに随ふべし。こは、「わかれ」と言る古仮字のなだらかなるを「わかたれ」と後に書あやまてるもの也。やがて次に、「わ

かれがたき事をいふ、「わかれ」がたくいひて、などあり。

廿二日 いづみのくにまでと、たひらかにねがひたつ。ふちはらのときざね、ふなぢなれどうまのはなむけす。かみしなかもゑひあきていとあやしうしほうみのほとりにてあざれあへる。

もとより、都までつゝがなからん事を思ふはさらなれど、まづ、和泉の國までとさし定めて、それまでたひらかにと願ひて、船出すといへり。かしこよりは畿内の地にして、賊難のおそれなければ也。「たひらかにと願ひたつ」と有べき、「と」文字を省けるは、上の「と」文字間ぢかくひゞきて、自然其意に聞ゆれば也。さて、こゝに、「ねがひたつ」とかけるは、大くゝりをいへるにて、まことは廿七日に船出せられしよし、次に見ゆ。此日ときざねといふ人、餞せし也。馬にのりて出たつ旅ならぬに、「うまのはなむけす」と興ぜり。「馬の鼻向」は、もと旅だつ事にて、馬の鼻を」行ききへ引むけていづるをいふ。門出といふに同意也。さて、門出も馬の鼻向も、いづれ旅だつ事なるに、餞するのみを「馬のはなむけ」といふは、「馬の鼻向の祝」などいひけんがはぶかれたる也。中ごろよりはいよく言そきて、たゞ「鼻向」とのみさへいへり。さて後、旅だつことをば「門出」といひ、餞をば「馬の鼻向」と呼わかちていひならへるもの也。又、「馬の



はなむけ」を「餞する」と字音にてもいへり。今も餞別といふ。「かみしなかも」ゑひあきて」は、諸本「かみなかしもゑひあきて」と有に従ふべし。今は、「し」文字の所、入たがひし也。かの船場にてみな酔すぐして戯るゝをいへり。そのかみ、魚肉の腐爛せるを「鰯<sup>アサ</sup>」といふ。それを、人のあざれみだるゝにかけたり。その魚肉は塩をくはふればあざれざる物なるに、人はさるうしほのほとりに有てあざれあへりといふ。酔態の常にかはれるを、汐海ながらあざるゝ方にもかけて、いとあやしくといへり。」

廿三日 やぎのやすのりといふ人あり。このひと、くにゝかならずしもいひつかふものにもあらずなり。これぞ、たゞしきやうにて、うまのはなむけしたる。

けふまた、八木のやすのりといふ人、餞せし也。この人、國にありては身がら重き人にて、かりそめの課役などにならず召出て、つかふつらの人にもあらざる也といふ。されば、餞のさまも、さすがに禮を尽して、昨日などの打とけてあざれし類ひにはあらぬを、「是ぞ、正しきやうにて」といへる也。

かみからにやあらん、國人のこゝろのつねとして、いまはとてみえずなるを、心あるものは、はぢず

ぞなんきける。これは物によりて、ほむるにしもあらず。

「國人の云々」は、この土佐の國人のみならず、大やう國守に従へる國人の有さまをいへり。任國のあひだは媚おもねりてきたり物せし人も、任とけて帰らんとするきはに至りては、今はとて見えこずなるが國人の「常也」。さるに、やすのりの如き心ある人は、さるべき禮義を守りて、家がらなど高ぶらず、同じ列にも立はなれ、更に恥ずして来にけるといふ。もとより恥べき事ならねど、さる心なき輩の、大やう恥辱とせるかたをうけて書るは、例の筆也。さてこれは、國守のをさめの正しきからにやあらんと記者譽るになして、ほこりていへり。されば「守からにやあらん」は、「心あるものは」といふにかゝれる也。語勢みるべし。此「守から」を、「人がら」「日がら」など、体言にいふ「がら」と意得て濁りてよむ説は、とられず。こは、「吾から」「心から」などの「から」に同じき用言にて、「守より」「守ゆる」といふ意ばへなれば、濁るべきにあらず。「から」をすまずしては、「にやあらん」ともうけられぬ事也。又、かやうにやすのりを譽るは、かならず餞のたまものゝよきにつきてのみほむるにあらずと、重ねて戯れいへり。「恥ずぞなん」の「ぞ」文字、諸本のなきに従ふべし。」

廿四日 講師、うまのはなむけしにいでませり。ありとあるかみしも、わらはまで多ひしれて、一も  
じをだにしらぬものが、あしは十もじにふみてぞあそぶ。

「講師」は、そのかみ國々一箇の國分寺ありて、その職を講師とよぶ。紀氏は、尤佛帰依の人な  
れば、殊さらにしたしみ交はられしなるべし。次にも再びおくりものあり。講師といふより、「い  
で」ませり」と敬ひて書る也。「多ひしれ」は、酔ておろかしうなるをいふがもとにて、或は酔狂  
ひ或は酔くづれて正躰なきをいふ。手しては一文字を引ことしらぬものも、足は踏まじへて、十  
文字になしてたじろぎたはるゝ也。「足は」といふに手を思はせたるなど、すべて文意簡易にして  
其滑稽のみやびたるはさらにもいはず。講師の到来といふより、文字しらぬ者も文字をなして遊  
ぶと書なせるなど、殊にお「かしき也。意を用ひて見るべし。こは、下ざまのもの、わらはなど  
をさせり。さて、「一文字」、「十文字」は、一の字、十の字といふ意にて、字の形をいへるなれば、  
仮にも「ひともし」、「ともじ」など讀ことなかれ。さるは字の数をいふになりて、こゝにかなは  
ず。「ものしが」は、「ものが」といふに「し」文字をくはへて、語勢をつよめたる當時の平言と  
みゆ。岸本由豆流が『考證』に、『うつば物語』國讓に、「いかに、これしがために、うれしくさ

ぶ」らはまほしく侍らん」とあるを引り。これも、「是が為に」といふを、「これしがため」といへる也。

廿五日 かみのたちより、よびにふみもてきたり。よばれていたりて、日ひとひ、よひとよ、とかくあそぶやうにてあけにけり。

今の土佐守の館より紀氏をよぶ也。此文の類ひ、事からは正しといへども、猶その調はたはれたる。又、ことさまたはれたるに、却て調は正しきもの多し。それはた、やがて滑稽のいみじきなるを聞知べし。さて、『長曆』もて推すに、此廿五日は節分にあたれり。さるは、大よそねぬべき夜ならねば、さる方にとりそへて、夜を明せる也。年ごろ住なれし館なれば、外ならずおぼえて、まろうどごゝちもせで、打とけさゝめきて明されけんを、「あそぶやうにて」といへるなるべし。

廿六日 なほ、かみのたちにてあるに、あるじゝ、のゝしりて、をのこらまでにものかづけたり。からうたこゑあげて」いひけり。やまとうた、あるじも、まろうども、こと人も、いひあへり。からうたは、これにえかゝず。

宴あかして、けふも猶館にありといふ。「あるじ」は、「饗」の字などあてゝ、今「もてなし」、「馳走ぶり」などいはんが如し。さるは賓客に對して、主人がたのするわざなれば、「あるじわざ」などいふべきを、「あるじす」といひならへり。諸本、「たちにあるに」と有。従ふべし。「のゝしり」は、もと、こわだかに口どきをいへる語なれば、こゝにては、酔みだれて、言おほきさま也。上にも、「しきりにとかくしつゝのゝしる」とあり。轉りては、勢ひつよき事にもいへり。さて、まろうどはさらにて、しもぐまでほど／＼物かづけたりといふ。「かづけもの」は、「引出もの」也。「をのこら」は、紀氏の下男をさす。『枕草紙』に、「をとこ、主などわろくいふ、いとわろし」などありて、そのかみ「をのこ」とも「をとこ」ともいふ。今も、「下男」「下女」をば、「をとこ」「をなご」といへり。さて、詩は朗詠し、歌をば、たゞ讀あげたるべし。詩も、たれぞの作れる也。古詩ならんには、打まかせて、「これにえかゝず」とはいふべからぬこゝちす。詩はみな正記にゆづりて、こゝにのせざるを、女なればえかゝぬふりに書なせり。新守の館にての事ども、女のしるべきならず。又、「よばれて至りて、日ひと日云々」など、女のいふと聞えねど、もとより紀氏のおのが書るをかくすにあらねば、かくことわりの引たがへるが多きをも、又あざ

れの一ふし」とせられたり。「あるじをさきにいひて、まろうどを次にかけるは、紀氏の自記なればにや」などいへるは中々也。こはたゞ語調にまかせたるもの也。

やまとうた、あるじのかみのよめりける

みやこいでゝきみにあはんとこしものをこしかひもなくわかれぬるかな

「あるじの守」は、今の土佐守也。哥の意明らけし。たゞ紀氏に逢んをこゝろとせしとよめるにも、かねて」したしき中、しられたり。

となんありければ、かへるさきのかみのよめる

しろたへのなみちをとほくゆきかひてわれににべきはたれならなくに　こと人々のもありけれど、さかしきもなかるべし。

哥の意、「はるぐ」の浪路をゆきかはり来て、我身に似んは、やがて、誰ならず君にこそあれ」と、さしむかへる公務の労をおのれにあてゝ、したしみい」たはりてよめり。「しろたへ」は、浪といはん枕詞、「ゆきかひ」は、「往交」ユキカヒにて、我と人とゆきかはるをいふ。たゞ「さきの守のよめる」といひで、「かへるさきの守」とこと更にかけるは、今漕出んをいひて、哥の「ゆきかひて」とあ

るをたしかに聞せたる也。紀氏の歌に、花鳥もみなゆきかひてぬば玉の夜のまにけふの夏は来にけりとあるも、花鳥と夏とゆきかはるをいふ。『古今集』にも、「たのしみ悲しみゆきかふとも」と書れ、「夏と秋と行」かふ空の通路は」とも有に同じ。また「往反る」を、「ゆきかひ」といふも常なれど、今はしからざる也。見わくべし。「誰ならなくに」は、「ならぬ」といふをつよめて「に」とおしたるなれば、「誰ならず」といふばかりに意得て、語勢、大やうたがふべからず。此外、人々の哥有つれど、書出べきほどのよきもなかりしといふをおぼめきて書り。

とかくいひて、さきのかみ、いまのも、もろともにおりて、いまのあるじも、さきのも、てとりかはして、多ひごとに「こゝろよげなることとして、いでにけり。

「前の守、今のも」といひ、又、「今のあるじも、前のも」といへる、かたへは「も」文字をはぶきて、對句にして、對ならざらしむるは、紀氏の文法也。おのれを「前の守」といひ、新守を「今のも」といひて、又、新守を「今のあるじ」といひ、おのれを「前のも」といへる筆づかひ、たゞならんや。かつ、前の守にあたりて、あるじをさへ「前のも」といへるは、やがて俳諧なるを見しるべし。階を送りくだ」りて、さてかたみに手とりくみてものせるは、古へ人の直情にして、

かへりて敦厚なるさま見ゆめり。今もへだてぬ中のわかれには、をりくする事にて、はなれがたき悲みの心を、せめてもやるしわざ也。何はあれ、とかく、はかなだちて、わりなき事をのみあなぐりいへるを此記の心とす。しかをさなき事は、酔のまぎれにすべきことなれば、「忽ひごと」といひて、有さまをもこめたり。「心よげなる言して」は、首途の祝言也。しか「快き歓びをのべんは、却て酔のすさびにて、心にもあらぬが哀なる也。さるは、只わかれの遠きのみならず、群盜さきぐにみちて、此ころ殊に物騒の海路なれば、命をあてゝ、はるぐ凌ぎものせられんうき旅の離情、いかに物はかなく、悲しとも悲しかるらん。思ひやりつべし。

廿七日 おほつより、うらどをさしてこぎいづ。かくするうちに、京にてうまれしをんなご、くにてにはかにうせ」にしかば、このころのいでたちいそぎをみれど、なにごともいはず。京へかへるに、をんなごのなきのみぞ、かなしみこふる。ある人々もえたへず。

京にて出生の女子、此ころ俄に失たるに、何事もおぼえずといふ。「かくするうちに」とは、帰京用意のうち也。ことさらに「京にて生れし」といへるに、やがて出京已前に生まれし事しらる。

とく生れしならんには、然はことわるべからず。されば、今年五六歳ばかりの「女子にて、紀氏



六十八九歳の時うませられし也。かく老ての後の子ならん、いとほしみのほど、思ひやるべし。「國にて」は、土佐の國をいふ。京に對へて、諸國をば、たゞ國といふ事、常也。上にも、「國にかならずいひつかふものにも非ず云々」、「國人の心として云々」などいへり。さて、うれしかるべき出たちをみれど、嬉しといさむこゝろなく、さる心なければ、さるかたのいそぎをば、何事もせず。只痛いけに育て「しを、都へつれかへらんのあらまし、俄にたがひける事をのみ、悲しみ嘆くの外、此ころのわざなしと也。まして、その亡跡にさへ、離れゆかん今日のかどで、思ひやるべし。さるは、親ならぬ人々すら、其かなしみにえたへずといへり。「女子のなきのみをぞ」といふべきを、「のみぞ」といへるは、古言也。「何事もいはず」は、「何事もせず」といふ也。前にもつかひなす事を、「いひつかふ」など、大らかにいへり。すべて、「みる」「きく」「いふ」「なす」などいへる詞を、「視」「聴」「云」「為」のうへに定めわかつてきはやかに物せる事は、かへりて古のふりに非ざる也。そもくかゝるいそしき中に、わざとして此日記書れる事は、此愁歎のいとせめたる心より起りたらんには、此ふしぐを、おろそかに見るべからず。さればぞ、こゝに至て、其文さらにあざれず。数言のうちに、いくそばくの悲しみこもりて、千歳の末を泣

しむるにたれるもの也。

このあひだに、ある人のかきていだせるうた」

みやこへとおもふものゝかなしきはかへらぬ人のあればなりけり

すべて、「此あひだに」といふは、そのかみ、中間事を起すの語にて、必其あひだをさすには非ず。今も、「悲しみこふるあひだに」といふにてもなく、「人々のえたへぬあひだに」といふにもあらざる也。次にも、「此間にはやくの守の子云々」、「此間に事多かり云々」、「此間に雲の上も海の底も云々」、「此間につかはれんとてつ」きてくるわらは云々、「此間に風よければ云々」、「この間に今日は笹のうらといふ所より云々」、「此間に和田の泊のあかれの所云々」などある、引つどへて知べし。家集にも、「源の公忠朝臣のもとに、此哥をやりける。此あひだ、病おもくなりにつけり」とあり。按ずるに、中昔の頃より、「去程に」といへる發語あるに似たり。是も、上をば受ることなるものから、「さあるほどに」と、其時をしかとさすにはあらぬが如し。いとかるきは、「さて」、「かくて」などいふにかよへり。又、「かゝるあひだに」、「といふあひだに」、或は、「行あひだに」、「くる間に」などある、ひたすら上よりつらなれる「間」の語も、大やう、此意ばへ也。

意得おくべし。さはいへ、其間をきとさしていはんも、もとより此語の本意ならんには、たま  
くいかであらざらん。「去程に」も、「しかあるほどに」と、語意のまゝに聞らん事あらんも論  
なきが如し。泥む事なかれ。今の俗文にも、「大切の品に候間心を用ひられ云々」、「承候間御尋申  
入云々」などいふ「間」の詞、其意はへ遺れるに似たり。いにしへ、「故」の語は、「かくあれ  
ば」の畧にて、今、「かるがゆゑに」とよむに同意なるものから、又、「かくて」、「さて」などい  
ふべきところき發語にも「故」とつかへる事少からぬは、「此間に」、「去程に」、又、「候間」な  
どもみな似たるものにて、今古おしなべて、大やうかはるべからぬ言語の自然也かし。哥は、明  
らけし。都へと思ひたらんは、いともうれしかるべきに、なほ物の悲しきは、たゞ獨かへらぬ人  
のあるがゆゑ也といふ。」

また、あるときには

あるものとわすれつゝなほなき人をいづらととふぞかなしかりける

又あるときは、わすれつゝ、猶いきてあるものと思ひて、いづくに往て見えぬぞととふ事あるが、  
悲しきと也。詞書より引つゞけて聞べし。上の哥をうけて、「又ある時は」といへれば、これも同

じ或人にて、紀氏也。

といひけるあひだに、かこのさきといふ所にかみのはら」から、また、こと人、これかれ、さけなにともおひきて、いそにおりゐて、わかれがたきことをいふ。かみのたちのひとぐのなかに、このくる人々ぞ、こゝろあるやうにいはいはれほのめく。

これよりは、立もどりて、又、けふ廿七日の事をいふ。「かくするうちに京にて云々」といへるより哥までは、今日發船する此國のわかれにつきて、此ころの歎きをとり出て、語りつづけたる也。「といひけるあひだに」といふは、此ほどの事どもを、立かへり、「しかぐ」といひ「けるあひだに」といふ意と、こゝろ得べし。「守のはらから」は、今の土佐守の弟なるべし。それに、猶こと人もたぐひ来れる也。此人々、この鹿兒の崎までしたひ来て、其磯におりゐて、もて来たる酒肴をとり出て、離別の情を尽せり。今、「守の館にては此追来たる両三輩のみぞ、みやびある方にいはるゝ」といふ。この「心ある」は、風雅の心也。『倭物語』に、「此在次君、心あるものにて、人の國のあはれに心ぼそき所々にて」は、哥よみて、書つけなどなんしける」といひ、『伊勢物語』に、「なまこゝろある女」などあるも、なま／＼のえせうたなどよむを思はせていへり。今も、哥

よむ人をば「こゝろある人」といふめり。前に、「こゝろあるものは恥ずなんきける」とあるは道義の心ある也。混ぜべからず。しらべにつきてわくべき事、いふもさら也。「やうにいられほめく」とは、さるかたにほのぐ聞えたるにて、世にいひたつるといふま」ではあらぬ、心にくきかたを、きかせていへり。されば留別の哥あるは、此兄弟の人のみ也。さてこそ、紀氏のことさらなる友なりけらし。後に、大聲の歌あれど、きくにたらず。

かくわかれがたいひて、かの人々の、くちあみもろはちにて、このうみべにてになひいさせるう  
た

をしとおもふひとやとまるとあしがものうちむれてこそわれはきにけれ」

かく遠きさかひにて、心ある友どち、逢もあへず、引わかれんとする情、思ひやるべし。「もろはち」は、諸本、「もろもち」とあるに従ふべし。さて、「くちあみ」は、きはめて、當世の諺也。

たとへば、今の世にも、辨をめぐらし、人をそごろかすを、「口車にのする」といひ、目だれを見こみて、得手にはむるを、「目壺におとす」といふなどのたぐひにて、詞を巧みにして人とごむる事を、「口網にかくる」といひけん。さるを、「海邊のゆかりに思ひよせて、さしもおのく打む

れ来たり。をしと思へる諸心をつらね出て、引とぐめんとするこゝろの歌を、網子とゝのへて、網引もよほす蟹がしわざになずらへて、諸持にて、此海邊にて荷なひ出せるなどいへる、尤興あり。されば、此一首、たれの哥とさし定めぬに似たり。さて、「くちあみも」といへるは、まことの網にあたりていふ。歌の意は、明らけし。「芦鳴の」は「打群て」の枕也。」

といひてありければ、いいたくめでゝゆくひとのよめりける。

さをさせどそこひもしらぬわだつみのふかき心をきみにみるかな　といふあひだに、かちとり、ものゝあはれもしらで、おのれしさをくらひつれば、はやくいなんとて、しほみちぬ、かぜもふきぬべしとさわげば、ふねにのりなんとす。

此「いたくめでゝ」は、専ら、歌がらをほむるにあらず。人々のこゝろざしの深きかたを感じる也。返歌の意、「すなはちしかり。『附注』に、「此うた、李白が汪倫におくる詩の、桃花潭水深千尺不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>汪倫送<sub>レ</sub>我情<sub>一</sub>といふにかなへり」といふ。或説に、『續古今』忠岑の歌に、「深けれど千尋の海もそこしりぬ人の心ぞ棹もおよばぬ」と有に似たりといへり。「そこひ」は、「そこ」とのみいふに、こゝろはかはらず。「そこひ」の「ひ」は、もとは、「様<sub>フリ</sub>」の約めにて、そのかみ、「そ

こひ」ともいへり。今俗にも、「そこひのしれぬ人」、「そこひを打明て」などいふめるは、古言也。

櫂」取は、このかぎりなき悲しみを見しらずして、おのれどち酒のみをへつれば、やがてとく漕出んとて、「汐みち来ぬ。今風も吹出ぬべし。はや乗給へ」と催したつる也。さるは、あたれるまへのわざなれど、わざともかくするやうにおぼゆるは、かゝるときの情なるべし。さる心より、「おのれし酒をくらひつれば」など、にくさげにいひなす、例の文也。「おのれし」の「し」は、ものをつよむる語にて、かたへをかへ」り見ぬ意あり。されば、「おのれのみ」といふばかりにあられり。「いなん」は、「ゆかん」といふに同じ。されど、語のものは、「ゆかん」は向ふさきにかゝり、「いなん」は、こゝをさるをいふ。

このをりに、ある人々、をりふしにつけて、からのうたども、ときにつかはしきいふ。またある人、にしぐになれど、かひうたなどいふ。

「このをりに」は、乗出んとするをりに也。「ある人々」は、送り来てある人々也。「折ふしにつけて」は、即ち、此わかれのをりにかなふ事にて、やがて、下に、「時に似つかはしき」とあるに同意なれど、こはしらべにまかせて、ことわりをいたはらざる文の常也。『抄』云、「唐人の陽関

などうたふやうに、餞別のをりにかなひたる古詩を吟じたるべし」といへり。「甲斐哥」は、『古今集』に二首あるうち、「かひがねを根こし山こし吹風を人にもがもや言つてやらん」といふ方をうたへるにて、前後の文の、風のゆかりも有にやとも思はるれど、さはあまりに入過たるべし。『古今』には、よくとゝのひたるを撰てとられたるならんには、猶外にもかひ哥有べき也。されば、いづれにても猶よくかなへるを謡ひつべし。さて、「西國なれど」ゝ、例の興ぜり。

かくうたふに、ふなやかたのちりも、そらゆくもも、たゞよひぬとぞいふなる。」

かく、とりぐ悲しみうたへるを、往昔、虞公がよく歌ひて梁塵を動し、秦青が悲歌して、行雲を遏めし古事に思ひよせたり。「塵はうごき、雲はとゞまる」、うらうへのさまを、一つに、「たゞよひぬ」とふさねうけて、其ことわりをかなへたるはたらきのいみじきは、さら也。「塵も雲も」といへるに、乗出る船の別れかねて、漂ふをしも思はしめたり。さるは、秦青が薛譚を郊衢に餞して悲歌せる事をふみて、「離れがたき至情を形容せるものなれば、其意、専ら行雲を遏めしにありて、梁塵のかたは軽く見べきに似たれど、これはた「船やかたの塵も」としらべかへたるに、船中振ひこぞりけん其哀聲、今さへ耳にあるこゝちせるは、実に千古の奇文といふべし。「たゞよ



ひぬべし」などいふべきを、「とぞいふなる」とたしかに書るは、例のにて、ありあふ人のいへるになせり。同じ餞する人の中にも、送るこゝろざし、受る心ばへ、浅深あり、「親疎ありて、一つならざるけぢめを、あざやかにみせてかゝれたること、編首にいへる如く、此記の意にして、紀氏の意にあらず。『源氏』の賢木に、「かやうなるをりの、まほならぬ事、かず／＼に書つくる、心なきわざとか、貫之がいさめたうるゝ方にて、むつかしければ、とゞめつと書たり。こはかくの如く、酔みだれて、眞顔ならぬ時などの、すべてしどけなき詩歌などをば、つど／＼書しるしなどせんは心なきしわざ也と、貫之もいさめおける方」のしれわざなれば、いとゞ書つけんもむづかしくて、筆をとゞめつ」といふ文也。「たうるゝ」は、「たはるゝ」にて、さる事、此日記などのふりに、されがきに書れたる書などありしなるべし。今傳はらねば、もとより、しかとはしられねど、人のさがなどいはん事をば好まれざる紀氏の人がらをば、こればかりにも、見るによしあり。猶、此ぬしの慈愛の情ふかゝらんをば全軀につきてうかゞふべし。さて此人々は、紀氏の旧知己にして、おしなべならず。されば「わ」かれがたき事をいふ」といひ、「かくわかれがたくいひて」と、二所までかさねいひ、哥にも「をしと思ふ人やとまると云々」などいへるを見る

に、今一日二日はと、あかぬ心にいひこしらへて、とゞめし也。其くちぐくにいへるを、「口網も、もろもちに」など、ざればみて書る、みな別れかねたる限り見えたり。こなたの哥も、「深き心を君に見る」といひ、とばかりもあらまほしさに、櫓取のいそぐをさへ、かへりて、心なきものにいへり。さて、國人の類ひな」らねば、此人々の名のみは、省て書れざりし也。さるは、親しきのあまりにて、もとより「守のはらから」とさへかければ、當世誰も知たる交りなるべし。さらば今も聞えし名なるべきを、それかとだにしられぬは、惜むにたれり。既に、『古今集』の作者なる酒井の人真など當時の人にて、土佐守なりし事、『大和物語』に見ゆれば、其あたりにやとも思へど、又仲實朝臣の『古今目錄』に、人真の此國守たりしは延喜十四年と」しるせるがまことならば、たがふべきにや。考ふべし。

こよひ、うらどにとまる。ふぢはらのときぎね、たちばなのすゑひら、こと人々、おひきたり。廿八日 うらどよりこぎいでゝ、おほみなとおふ。このあひだに、はやくのかみのこ、やまぐちのちみね、さけ、よきものどももてきて、ふねにいれたり。ゆく／＼のみくふ。

「おふ」といふは、物に物のつきかさなる名也。それより、物に物のつがんとするをも「おふ」

といふ。猶、物に限」らず、「名におふ」、「恨をおふ」などの類、みなしかり。「負」「帶」「追」などの字を、こもぐやとひつかふにも、大やうをしるべし。今も大湊を心ざして、舟をつけんとするなれば、「おふ」といはんもことわりなきにあらねど、さきの、動きうつらぬ物をさして「おふ」といへるをばいまだ見ぬこゝちす。されど、『萬葉』卷六の長歌に「吾者叙追遠杵土佐道矣」ワレハソオヘルトホキトサチヲとあるなど、今に似たり。又、常に「追手」といひて、風の船をおふは、論な」し。さる風を便りに漕行より、やがて其おはるゝ船のゆくらんさを、「おふ」ともいひならへるにや。尋ぬべし。「はやくのかみ」は、『抄』に、「紀氏より以前の土佐守の事也。彼前司の子、千峯といふ人、國にとどまりゐたるにや」と云り。さて、此人、船中のなぐさめにとて、酒、其外のたべもの持せ来て、おくり入たる也。さるは、猶浦戸にありての事なれば、さて漕出て後、ゆくゆく物せられし也。」

廿九日 おほみなとにとまれり。くすし、ふりはへて、とうそ、白散、さけくはへて、もてきたり。こゝろざしあるに、にたり。

こは、在國のあひだつかへたる國の醫師なるべし。元日にものすべき屠蘇白散に、其料の酒をさ

へ加へたる、船中への心づかひ、懇切のさまなれば、「志有」といひ、又、薬師の薬もて来たらん、わきて心いたるわざにもあらざめれば、「似たり」とうけたる味ひ、をかしみあり。やすのり、ときざね、守のはらからなどに引くらべて見るべし。「ふりはへ」は、ついでならず、わざわざ来たるをいふ也。「ふり」は、事をつよむるの發語、「はへ」は長く引たるの称なれば、かたへをかへり見ず、一すぢにむかふさまよりいへり。「屠蘇」を「とうそ」といふは、「と」文字を引のべて、其言のしらべをなすにて、「富貴」を「ふうき」、「女房」を「にようぼう」といふ類、眞字のみならず仮字にても、「たべ」を「たうべ」、「まけ」を「まうけ」などいふ、常の事也。」

元日 なほ、おなじとまりなり。白散を、あるもの、よのまとて、ふなやかたにさしはさめりければ、かぜにふきならさせて、うみにいれて、えのまずなりぬ。いもしあらめも、はがためも、なし。かうやうの、ものもなきくになり。もとめしもおかず。

よべの白散を、ある人の、わづか夜のまの事也とて、とりあへず、船やかたのはしにさしはさみおきたれば、夜一よ、汐風ふきく／＼て、いつか海に吹落して、あたたら、白散をえのまずなりぬといへり。これも、ある者の僥忽をかける、例の筆つき也。「吹ならす」は、「吹馴る」にて、吹

がうへに吹て、風のまゝになすさま也。それを、「風にならさせて」といふは、彼或者の、かな  
させたるをいふ。さて、白散をうしなへるは更にて、芋も滑海藻アラメも餅もなければ、年の始をい  
ふべきかたもなしと、わびたる也。「いもじ」は、諸本、「いもゝ」とあるに従ふべし。」今は、「い  
もゝ」とゆりてかけるが、「いもじ」となりたる也。『抄』云、芋あらめなど、今も、元日に用る  
もの也。『附注』に、『延喜式』大膳下、正月最勝王經齋會供養料、芋六合、滑海藻二両二分と書  
り。すべて正月の式に用ひし事と見ゆ。「はがため」は、年の始めに物くひ初るをいへるがもとに  
て、さるは、専ら、餅飯モチヒをいふより、餅をむねととなふる事とはなれる也。今下ぎまに至るま  
で、鏡餅キョウヒに向ひ雑煮をいふ事をいふ。むかしは、打かへして、餅鏡といへり。さるは、物の  
はじめに喰固めて、齒の落ざらん事をいへるにて、水を若水とくみ、茶を大福とたてゝことぶ  
きなすたぐひにて、定まれる元朝の祝言也。齒の文字につきて、齡の事などいふ説は、いふに  
たらず。齡を齒ハといひてかなはんや。又、齡を固むるといふ事有べけんや。思ふべし。門人山科  
元幹云、齒固は、蘿蔔の称也。『玉葉』の承安三年元日の條に、當腹之小兒為令「戴餅」云々、民  
部大夫、兼定取餅件餅入ニ手苜蓋一敷ニ檀帟一有ニ橘并齒固一  
云々 以ニ薄様一裹レ之餅三枚也とあり。又、『玉葉』の承元四年の元日

にも、有<sup>二</sup>小兒戴餅事<sup>一</sup>云々、以<sup>レ</sup>餅三度當<sup>レ</sup>頂、了則以<sup>レ</sup>蓋返<sup>二</sup>給女房<sup>一</sup>、次取<sup>レ</sup>橘觸<sup>二</sup>兒頂上<sup>一</sup>、長押打揚、三成橘三枝并九也次第如<sup>レ</sup>此三度、次取<sup>二</sup>大根<sup>一</sup>觸<sup>二</sup>兒頂<sup>一</sup>云々。この大根をとるとある、『玉葉』の

菓固云々と同式に用ひられたるに、「齒固は蘿蔔なる事を知べし。『延喜式』、『西宮記』、又、『江次第』、内膳の齒固等、第一に大根をこそ挙げられたれ。『式』、『西宮記』等、すべて餅なし。『江次第』、御厨子所より調進の齒固に見えたるのみ。されば、餅をむねといへるは、後の俗か。蘿蔔は四時に盛育して、世に功能多きが中に、口中の壞爛を治すといへり。又、今俗、獸肉を喰て後、必蘿蔔を食するも、其齒牙のゆるやくを固むる也。」これ「齒固」と称するにたれる物也といへり。此説、棄難し。『枕草紙』に、「えせものゝ所得るをり」の事とある所の第一に、「正月の大根」とかける、これ齒固の時の事にて、尤當時も、取はやされしさま、思ふにたれり。又芋、滑海藻につらねたるも、大根めきて聞えざるにあらず。これによりて、再案ずるに、もとは元朝に始て物くふ事を「齒固」といひしを、後に式とまでなりゆくほどに、「くさぐさ」物の具はる方より、実には、其齒を固むるものをしも加へ供しつらんか、つひにその実験あらんには、これも、其名を取たるなるべき。又、次の章に引たる、『保憲女集』にて見れば、鮎も餅も、ひとつに「齒がため」とい

ひしに似たり。さるは、中に、ことゝある一物をさしてもいひ、又、もとにかへりておしこめて  
もいへりしにや。かつ、『散木集』に、「齒がための鏡のをしきのしき物に書付侍りける われを  
のみ」世にももちひのかぐみ草咲さかえたる影ぞうかべる」、「伊勢に侍りける比、宮の御はがた  
め、まかでたるを見てよめる ます鏡思ふさまにてうつりけん君が御影の名残をぞみる」などあ  
るは、もちひ鏡なる事、論なければ、餅をさしていへるも、むげに後の俗ともいふべからず。い  
づれ後哲のさたをまつべし。さて、こればかりの物もなき國也と、船のすまひの事たらはぬを、  
やがて國に」しもかけていひ落せるは、例のあざれ也。今も、家の内のまどしきを、不自由なる  
世界などはれいふ意ばへに似たり。実に芋あらめはさらにて、もちひさへなき國あらんやは。  
「求めしもおかず」といへるは、元日の料にとて、もとめ来もせざりしといふにて、その求むる  
所は、土佐の國よりの意なれば、やがて又船中の事のみと、しるき也。かくざまに、しどけなき  
が、此日記のすがたと知」べし。「もとめもおかず」といふに、「し」文字をくはへて其語つよま  
るより、「殊さらに」といふ意ばへこもる事也。

たゞおしあゆのくちをのみぞすふ。此すふ人々の口を、おしあゆ、もしおもふやうあらんや。

鮎を歳首に用ふる事は、彼鮎子、立春の日より始めて流れに向ひて逆上り、つひに下る事なきものなるを、祝ひてなるべし。年魚の名に「よれるにはあらじ。芋あらめはもとよりにて屠蘇もなく歯固さへなきをうけて、「たゞ押鮎の口をのみ」といふ。たま／＼押鮎のみありし也。「口をのみすふ」は、乾魚の頭をたうべるさまを見たてゝ、例のあざれいへり。門人三宅意識云、『公事根源』元日節會の所に、「腹赤の贅とて魚を筑紫より奉る也云々、腹赤の食やうとてくひさしたるを、皆とりわたして食けり」とあり。恐らくはこの押鮎も、其ふりにて、一魚の頭をつぎ／＼くひめぐらすなるべしといへるぞ、然るべき。『西宮記』云、正月元日、早朝供奉屠蘇御膳事、猪宍二盤一鮮 押鮎一盤切盛置二頭二串一 煮塩鮎一盤同切置二頭二串一とあり。『江次第』も、これに同じ。この切盛置二頭二串とあるにつきて、今をも准へ思ふに、たゞ押鮎の頭ばかりを物せしならん。さらば、「口を吸」といふによしあり。『考證』に、『賀茂保憲女集』云、「かしらしろき翁、おんな、はがためとおぼしき事をいひとゞめて、あゆの口をうつくしみ、影のうかばぬもちひの鏡として云々とあるを引けり。これも鮎の頭をくひて、祝ひ物せるを、「うつくしみ」といふなるべし。わきて鮎は、口がちなるものなれば、頭といはで鮎の口といひ、口といふよりすふといひなせる、いみじき滑稽也。



しか、人々のすふ口を、おし鮎もし心有て思ふやうあらんや、しられずといふ。さるは、「其人々にすきすかぬ擇びありて、あるはうるさしとも、あるはうれしとも思ひなすらんと、男女の中にとりていへり。

けふは、みやこのみぞおもひやらるゝ。こへのかどの、しりくめなはのなよしのかしら、ひゝらぎら、いかにぞとぞ、いひあへる。

これまでは、元朝の式の事たらぬかすぐをいへり。さて、けふの都のけしきを、さまぐ思ひやりて、「いかゞあらん」などいひあへる也。『抄』に、こへのかどは、小家の門なるべし、「しりくめなは」とは、『日本紀』に、「左繩端出」とも、「端出之繩」とも書り。神前にかくる注連の事也といへり。さて、其注連繩に、鰻魚ナヨシの頭、柁など付たる也。「なよし」は、いにしへ「口女郎」といひ、近俗「ぼら」とよぶ物也。今は、注連鰯エビには、もはら鰻エビを用ふ。田舎には、鯛などならませてもつけ、又、筑紫わたりには、石首魚イサといふ魚を、さながら懸るともいへり。かゝる式は、世々をへてうつりゆく中に、なほ其習俗ありて、一般ならず。京には、當時鰻のかしらを物せしならん。江州大溝のあたりには、今も、すなはち鰻の頭を付る家ありといへり。此魚は、

成長するに従ひて、其階級の名かすぐによびわくるより、「名吉」<sup>ナヨシ</sup>となへて、今の俗にも出世の魚といへり。されば、そのかみ歳首にはひ用ひたるなるべし。柗は、四時不変にして、嚴寒に雪をけすの陽木なれば、初春にものせん事、尤よしあり。中頃よりは、柗に鰯の頭をさし加へて、「やいくさし」と名づけ、除夜に鬼の入くるを防ぐとて、門戸をはじめ、さるべき口々にさしまはす事あり。「やいくさし」<sup>ヤイクシヤシ</sup>は弗園刺の畧也。後には、是を節分に用ふ。今は、さるかたならで、柗も鰯も一つに注連繩にかざり付たるをいふ。「なよしの頭、ひゝらぎら」と、つらねくだせる語勢、見るべし。諸注、當初は、「鰯のかしらを柗にそへて、今の鰯のかしらの類ひに門々にさしたらんと思へるは、謬れり。さらば、いづれ旧年の式なるを、新らしく元日の物にいひ並べんも似げなく、かつ、常は見たてなき小家どもの門に、けふしもいかめしう饅りつけたるしめ縄の、ことさらびたるさまのおかしげならんをこそ思ひ出て、いかにともいひしらふべけれ。かの弗園刺<sup>フエンサシ</sup>ばかりのものならんは、然いふべくも思」ほえぬこゝちす。況や「しりくめなはのなよし」と、「の」文字あらんには、注連に付たるなよしなる事、論なき也。又、今の鰯の如く、柗にそへんならば、二品也といへども、併せて一物也。柗等<sup>ヲ</sup>といふべきにあらず。「等」は数ある物をすべ

ふてにをはにて、次に「長谷部のゆきまさら」とある「等」にひとしく、なよし、柸二物をうけたるに論なし。其外に飴りそへたらん数品をも、大やうおしこめて思ひやら」るゝなど、自然の事也。又柸にくはへたるならば、「柸のなよしの頭」といへでは、語をなさざる也。混すべきにあらず。さて、式に頭のみを用ふる事多きは、専ら其腐臭を恐れ、かつ、魚類は頭を見て、其品をわかつてば也。猶、鳥類を翹もてわくるが如し。又、賤家をば、打まかせて「小家」といへり。『源氏』の夕顔に、「小家がちにむづかしきわたり」、『枕草紙』に「小家などいふものゝ多かりける所を、今造らせ」給へれば」などの類ひ、挙るにたへず。なほ其後もさる賤しきわたりをばおしこめて、「小家」とのみいひなれたり。『拾芥抄』の古図を案ずるに、右京の坊間の區中、数ならぬ處々をば、みな小泉としるしたる、さるは、小家住といふ事を、「こへずみ」、「こいずみ」などいひなれたるを、其まゝ目じるしに、「小泉」と借字にて書るもの也といへり。さらばそのかみより、賤家をば「小家」といひて、猶「こへ」と省」きてもいひけんさまおぼゆめり。小泉とかけるは、「すみ」「つみ」の仮字だがへれど、目じるしばかりには、さばかりを何かはいはん。「す」と「つ」はもとより通音にて、「次」<sup>ツキ</sup>を「すぎ」ともかよはしいへる例あれば、しひてとがむべきに非ず。

又案するに、此『拾芥抄』の「小泉」は、やがて「小家」の文字を誤れるにやとも思ひ侍り。いづれにもあれ、今「こへ」の證とするには妨げなし。「いかにぞとぞ云々」は、「いかにぞとなんい」ひあへる」といふに同じ。

二日 なほ、おほみなとにとまれり。かうじ、もの、さけおこせたり。

『抄』云、最前の講師のもとより、また食物、酒などおくりたるべし。

三日 おなじところなり。もし、風なみの、なほしばしとをしむころやあらん、ころもとなし。

かく連日はりて、船出する日和なきは、もし、風」も波も、今しばしと我わかれをしたふ心あらんもしれずといふ。國政などよくとる人をば、海の神もをしみて、さる奇瑞をあらはせるなど、世にある格の事なれば、さる方めかして、例の身をふくかたに書なせり。上に、「年ごろよく具しつる」といひ、「守からにやあらん」など自負せると同じ意也。「心もとなし」は、いかゞあらん、然にはあらじかと、猶いぶかしみ落ぬかたにいひて、いよ／＼」其事を眞にするのたはれ也。

四日 かぜふけば、えいでたゝず。まさつら、さけ、よき物たてまつれり。かうやうに、ものもてく

る人に猶しもはあらで、いささけ<sup>か</sup>わさせせず。ものもなし。にぎはしきやうなれど、まくるこゝちす。

「たてまつれり」とあがめて書るは、かの記者の女になりていへり。かく、をり／＼思ひ出て、もとの意に立かへりいふが、やがて滑稽也。諸本、「猶しもえあ」らで」とあるに従ふべし。今は、「え」を「は」と誤てる也。「猶しもはあらで」といふ語、意あるべきにあらず。「いさゝけわさせせず物もなし」とあるも、語をなさず。一本、「せさすものもなし」とあるに従ふべし。又「いさゝけ」は、決めて、「いさゝか」の寫誤也。「いさゝけ」といふ事、いまだ聞なれず。かつ、前後「いさゝか」とのみあるを、こればかり、しか異やうに書かふべきにあらず。「わざせさす物」は、「かづけ物」也。さて、まさつらに、いさゝかのむくいする物もなければ、何くれととりはやし、さわげども、さる心より其人に負るこゝちすといへる事とは、大やう思ひとらるゝものゝ、詞のつゞき通らねば、さとは聞えざる也。「猶しもえあらで」とは、「もだしてはえあられず」といふ事なれば、下にいさゝかの物つかはすとか、何とぞなくては、文意ことわりをなさず。「猶しもえあらで、いさゝかわさせさすものもなし」といふ語、あるべきならんや。猶此間に脱文な

どあるべし。善本をもとむべし。

五日 風なみやまねば、なほおなじところにある。人々たえずとぶらひにく。

六日 きのうのごとし。

七日になりぬ。おなじみなどにあり。けふはあをうまなどおもへど、いとかひなし。たゞ、なみのしろきのみぞみゆる。」

式日なれば、「七日になりぬ」と、ことさらにいへり。『抄』云、『公事根源』云、「白馬節會を、或は青馬の節とも申也。其故は馬は陽の獣也。青は春の色也。これによりて、正月七日に青馬を見れば、年中の邪氣を除くといふ本文侍る也云々」。白波ばかり見えて、白馬は思ひやるかひなしと也といへり。愚按ずるに、皇國は、古より潔白質素をむねとする故に、大やう色も白きを用ひらるゝこと、論なし。よりて、馬をも白馬を尚みて、御寮にもめされたるべし。さて、のち、漢さまの禮行はるゝに至りて、春を東郊に迎へて、青馬七疋を用ふるなどいふ本文ある事にや。承和の頃より、さる式をいさゝかかたどり給ひ、郊外にはあらで、豊樂院、或は紫宸殿などにて、をり／＼これを行はるゝものから、猶、其馬をば、もとよりの白馬を引れしが、やゝ上陽人日の

行」事となり、其の式備はりて、甲斐、武藏等の御牧の馬を牽るゝに及びても、猶其始めによられたらんには、名は青馬にして、実は白馬を用ひらるゝ事なりけんかし。されば、今も波の白きに思ひよせたり。文字にも、ふるくは本文を守りて、青馬節會と書れたれど、後にいたりては、其実に付て、白馬節會とも書り。さはいへど、文字こそあれ、猶「あをうま」と称へて、「しろ」うまの節會」とはいはず。さて、そのかみ、他邦の禮によらるゝ事多しといへども、もとつ皇國の事實をば、堅くうつされたるも、更に論なき事、古典につきて知べし。『萬葉』に、「水鳥の鴨の羽の色の青馬を」といひ、又、齋宮女御の、「松の葉の色にかはらぬ青馬を」とよみ給へるなどは、只、「青き」といふにつきたるにて、かくよみなすも、また哥の常也。況や、其もと青馬なるには、意も差ふべからず。兼「盛が「降雪に色も変らで牽ものをたが青馬と名づけそめけん」といへるなどは、実につきてよめる事、又論なし。或説に、そのかみは、青馬なりしが、後に、白馬に更ためられたりといへるは、おぼつかなし。さる事、物に見えたる事なし。たとひ威初は白馬ならんとも、其式、そなはりくるまに／＼、本説の青馬にこそ更ためらるべき事なれ、青馬を白馬にかふべきいはれ、」更になき事也。こは、そのかみ、「青馬節會」とかき、又、「あをうま」

とよめる哥などに惑ひたるもの也。さる事ならぬは、既に辨ぜり。即ち、齋宮の「松の葉の色にかはらぬ青馬を」とよみ給ひしは、此記に「波の白きのみぞ見ゆる」と書れしよりは後なるにも、こは、只、あを馬といふ詞によりて、しかよみなせるにて、実は白馬なる事を、證<sup>アキ</sup>らむべし。又、俊頼の「引駒の松のみどりの色なれ」ば千年をすぐす庭かとぞ見る」とよまれたるは、いよ／＼後なるをや。さて、當時は、節會ならでも、打まかせて、「あをうま」ともいへりと見えて、「醫心方」に白馬を「あをきうま」と訓せたり。

かゝるほどに、ひとの家の、いけと名あるところより、こひはなくて、ふなよりはじめて、かはのもうみのも、こともものども、ながびつになひつゞけて、おこせたり。」  
わかな、こにいれて、きじなど、はなにつけたり。

池といふ所の、人の家といふ事を、しか面白くいへり。「人の家の池」とつらねて、其庭わたりの、池めくおもむきを見せ、「池と名ある所よりこひは」とつゞけなして、やがて、其池よりとり得たらんこゝちせさせたる、あざれのあや也。さればぞ、次に、「此池といふは所の名也」と、再びたしかにことわれり。さて、池には、かならず鯉鮒ある中に、鯉をもはらにいへば、其「次なる「鮒



よりはじめて」といひて、例の興ぜり。「池」といふをうけて、「川のも海のも」といふ。「荷なひつづけて」とあれば、長櫃の数、一合のみにあらず。魚類、異物、わかち入たるべし。異物は、魚類ならぬたべ物、或は酒など也。附注本には、「おこせたり」の次に、「わかな、こにいれて、きじなど、はなにつけたりとあり。」今は、脱たる也。さらでは、「わかなぞけふをばしらせたる」といふことをさまり難く、かつ、其方の哥さへあれば、いよくしかと「有べき也。此文、わづかなる一句といへども、外の手にいづべきにあらぬを味ふべし。次に、「この長櫃のものは、皆人々に、わらはまでに、くれたれば」とある「長櫃の物は」といへるに、長櫃の外なるものある事、しらる。魚類また異物どもは長櫃に荷なはせ、若菜と雉とは籠にいれ、花に付てもたせおこせし也。花は、もとより、折からの梅花なるべし。『伊勢物語』にも、「長月ばかり、梅のつくり枝に、きじをつけて奉る」などあり。後にも、大賞會の膳部調進の式に、梅の造枝に雉子一番をつけて奉れる事ありて、御厨子所預高橋家に、今も、深秘せるは、當時の雅習ぞ、権輿なるべき。さて次に、此みやびをうけて、俗性よき人なる事をことわれり。

わかなぞ、けふをばしらせたる。うたあり。そのうた

あさぢふののべにしあれば水もなきいけにつみつ」るわかななりけり　いと<sup>お</sup>もかしこ<sup>か</sup>し

白馬もみねば、七日のしるしもあらぬに、此おくり物のわかなこそは、けふをしらせたれといへり。歌は其籠に付たるべし。哥の「浅ぢふ」は、野といはんの枕のみ。名こそ、さはいへ、まこととは、野べにしあれば、水なき池也。其「水もなき池にて、つみしわかな也」といふ。畢竟は、池とはいへど野にてつみしといふ事を、あやによみなせる女哥也。若菜」は、池にも野にもつめば也。「池とはいへど水もなし」といへるに、自然に卑下の意あり。「いとかしこし」は、諸本に「いとおかしかし」とあるに従ふべし。さは、籠のわかな、枝のきじより、哥かけて、其みやびたるを「おかし」といへり。

このいけといふは、ところの名なり。よき人の、をとこにつきて、くだりて、すみけるなりけり。此一句は上の云々を、たゞしく注して書る也。」

(表紙題箋)

『土左日記創見』

上之末

（見返し）  
なし

このながびつのものは、みなひとぐに、わらはまでにくれたれば、あきみちて、ふなこどもははらつづみをうちて、うみをさへおどろかして、なみたてつべし。

さて、かの長櫃の魚類、異ものゝ類をば、残りなくみな人々にあたへし也。舟子どもは、中にも酔しれて立さわぐめり。腹鼓は、いやしきものゝあるさま也。くひみちて楽しむをいふ。『莊子』馬蹄篇に、「ホフ含<sup>フクン</sup>哺而熙鼓<sup>テタノシハラフ</sup>腹而遊<sup>ウチテアソフ</sup>」などいへる、今にかなへり。さて、船中のみならず、海を」さへ驚かしめて、浪をも立つべしと、例の筆にまかせて、すさまじきまでいへり。

このあひだに、ことおほかり。けふ、わりごもたせてきたるひと、そのななどぞや、いまおもひいでん。このひと、うたよまんとおもふころありてなりけり。とかくいひくゝて、なみのたつなることゝ、うるへいひて、よめるうた

日頃にたがひて、けふは、さすがに人日の心ばへ有べきに、あまさへ、したゝかなる贈物さへありて、これが返しなど、「何くれ事多かるべき日也。かゝる日しも、破籠持参せし人あり。さる事のまぎれに、其人の名もわすれたりといふ。次に、誹謗せんための筆つき也。其人の名、何とぞやいひし、わすれたり、今思ひ出べしといふ。五井純禎が頭書に、「此人しれたる男にて、又、哥

も拙ければ、其名をわざとあらはさずして、かくはいへるならん」といへり。此書、褒貶に心をおかずといへども、さすがにあしき方の名をばあらはさざる也。此えせ人、あるじのすきなるをし「れゝば、歌よみかけんとて来たると也。其はらめる哥の心しらひをこしらへつくらふために、船出もなりがたきまであるゝ事など、とかくいひて、結句に、さてさて、けしからずも「波のたつなる」と、愁ふるかほにて、歌のはしをいひおこせる也。

ゆくさきにたつしらなみのこゑよりもおくてなかんわれやまさらん」と、よめる、いとおほごゑなるべし。もてくるものよりは、うたは、いかゞあらん。このうたを、これかれあはれがれども、「ひとりも、かへしせず。しつべき人もまじれゝど、これをのみいたがり、ものをのみくひて、よふけぬ。このうたぬし、又まからずといひて、たちぬ。

『抄』云、「大聲」とは、「浪よりまさらん」といへるをたはれたり。又、破子のしつらひのよきよりは、歌はおとれりといふ。「ゆくさきにたつしら波」といへる、船路に禁忌也といへり。さて、これかれ、面白きやうにはいへども、たれひとり、かへしする者なしといふ。そは、あへしらひ、ほめそやす也。す」べき人もまじりをれども、みな、この破子のみをめでいたがり、その物ばか

りくひつゝ、夜更ぬれば、哥ぬし、手もちなくて其座を退きし也。上に、「もてくる物よりは云々」と破子のよき事をいへるをうけて、「これのみいたがり」といふ。「いたがり」は、いたはる方より出て、たすけてほむる事を、大やういへり。後に、「いたく、住の江、わすれ草」といへるをも、引あはせて見るべし。「まからず」は、「まからんず」にて、其田舎人のいへるまゝを書れたり。「まからんず」は、「まか」らん」といふことを、「す」とおさへてとむる語也。或説に、「上に、波のたつなることゝうるへいひてといへる、うるへの詞も、きゝなれぬこゝちす。波のたつなる事までは、此土佐人の詞、うるへいひては、記者の語なれど、わざと、上なる、まからずの田舎詞をうつしうけて、うれへを、うるへと興じかけるにても有べきや。考ふべし」といへり。

あるひとのこのわらはなる、ひそかにいふ、「まろ、このうたのかへしせん」といふ。おどろきて、「いとおかしきことかな。よみ」てんやは。よみつべくは、はやいへかし」といふ。「まからずとて、たちぬる人をまちてよまん」とて、もとめけるを、よふけぬとにや、やがていにけり。

「まろ」は、もと驕<sup>オゴ</sup>れる自称にて、大やう、たかきゝはのいへり。それよりはなれて、憚<sup>ハナレ</sup>からぬ友どち、或は、幼童の語のみにつかへり。わらはゝ、いまだ謙遜なければ、やんごとなき前に

ても、ほこりに物いふ、常の事にて、今も「おれ」「わし」など憚からずいふめり。今「まろ」といひ、又、はぢらひ「ひそかにいへる」など、みなわらはべのさま也。さて「返しせん」といふ、思はずなるに驚きて、「興ある事をいふものかな。まこと、よみてんや。いと覺束なし。もしよまば、とくいふべし」と也。『抄』に、「これも、紀氏の童女にや」といへるは、しかるべし。次に、「おんなおきなに、をしつべし」といへる、もし男子ならんには、おんなをば引出べからず。女子に、おきなは引つべし。さるは、男にも「並ぶべし」といふになれゝば也。『抄』云、「わらは、哥ぬしを尋れど、威前立ぬるまゝに、いにたる也」といへり。「夜更ぬとにや」とはかけれど、さきに「やがて」といひしは、詞にて、座つき面白からねば、すぐに帰りしなるべし。

「そも／＼いかゞよんだる」と、いぶかしがりてとふ。此わらは、さすがにはぢていはず。しひてとへば、いへるうた

ゆく人もとまるもそでのなみだ川みぎはのみこそぬれまさりけれ　となんよめ<sup>る</sup>

「そも／＼」は、上文を承て端をあらためいふ語也。今も、それはそれにして、「其哥は、まづいかによみたる」といふ意也。「いぶかしがり」は、見事よみたりや、いかゞとあやぶみとふ也。わ



かれ行人も、とゞまる人も、同じ涙の袖にみちて、川なせるが、「いとゞ汀のみまさりゆく」と也。

「汀のまさる」は、水かさのまさるをいふ。すなはち、紀氏の哥に、「雨ふるとふく松風」は聞ゆれど池の汀はまさらざりけり」、又、「君をしむ涙落そふこの河のみぎはまさりて流るべら也」などあり。詞たらはぬこゝちすれど、みな「汀の水のまさる」といふ也。今は、「其涙川、やがて袖なればぬれまさりけれ」といふ。ぬるゝがまさるなれば也。さきの哥に、「行さきに」といひ、「おくれてなかん」といへるに答へて、「ゆく人もとまるも」といへり。「よめり」は諸本、「よめる」とあるによるべし。さて、此哥、かけ「歌の意をうけたるより、「袖の涙川」といふなど、更に童のものにあらず。かつ、「汀のまさる」といふは、すなはち紀氏の語にて、外に聞しらぬこゝちす。此後、兼盛の、「山河の汀まされる春風に」とよめるは、即ち、紀氏をまなべる也。次に、「わだつみのちふりの神に云々」、「祈りくる風間ともふを云々」など、「童のよめり」とあれど、其哥さま老成したるは、みな紀氏のなるべし。又、「たてばた」つめればまたある云々、「漕てゆく舟にてみれば云々」、「まことにて名にきく所云々」の三首などは、心ばへばかりは其童のよみたるを、哥と引なほされしものならんか。さるは、此章など、いかに俳諧ならんからに、「まからずとてた

ちぬる人を待てよまんとて、求めける」といひ、「さすがに恥ていはず。強て、とへば云々」などいへる、さばかり造りこしらへずとも有なんと思ふには、其「かたばかりは、むげになき事にもあらざるべし。次なる、「照月のながるゝ見れば云々」、「都にて山端にみし月なれど云々」の或人の哥などをも、やがて、其子なる時文ぬし、『後撰』に貫之として入られたるにも、此記の「或人」は、みな紀氏なる事をするべき也。この外も、或女などいへる、たまゝは其方なるも交らんものから、大やう、紀氏となるべく見ゆめり。されば、『六帖』には、「棹させど底ひもしらぬ云々」、「風による波」の磯には云々、「忘貝拾ひしもせじ云々」の哥などはいふに及はず、上に挙げたる「祈りくる云々」、「わだつみのちふり云々」の童の哥、また、「おぼつかなけふは子日か云々」の女の哥、「追風の吹ぬる時は云々」の淡路が哥をも、ことごとく、貫之として出せるにも、そのかみは、全部、紀氏の、自詠をあやどり興ぜられたるといふ事をば、大やう誰も心得しものなるを知べし。」

かくはいふものか。うつくしければにやあらん、いとおもはずなり。わらはごとにては、なにかせん。おんなおきなに、をしつべし。あしくもあれ、いかにもあれ、たよりあらばやらんとて、おかれぬめ

り。

『抄』云、「かくはいふものか」は、わらはとして、かやうにはよむ事かと、おどろける詞也といへり。此子を愛する心からにや、おもひの外、よくよめりと思ふ。「かばかりの哥を、わらはべのたはれ言といはんは」何の詮なし。媼オウナか翁かの返哥也として、つかはすべし」と也。やはり、其まゝわらはの也といひやらんが、猶は、え有べきを、「何かせん」といひ落し、さらば、只、をとなの哥也としてたるべきを、猶うへにいはんとて、「おんなおきな」とまでいへるなど、中々事たがへるに似たる、みな例の也。「おんな」は、老女をいふ。さて、かくまで思ふは、おのが引かたにて、実はよからぬ哥にや。さは、よしあしくもあれ、又、いかにもあれ、かくもよめりしものを、たよりあらばついでにやるべしといひて、かいつけておかれしやうす也と、紀氏のさまを女のかける也。只、さばかりの哥をかぎりなくほめたてゝ、また、俄に「あしくもあれ云々」といへる、すべて、とりしめなく書やりしものにて、十八日の末に、三十七字の哥よみし事を、しどけなく筆のゆくまゝに、そしりながせしと同じ書」さま也。

八日 さはることありて、なほ、おなじところなり。こよひ、月はうみにぞいる。これをみて、なり

ひらのきみの、やまのはにげていれずもあらなんといふ哥なん、おぼゆる。もし、うみへにてよまゝしかば、なみたちさへていれずもあらなんとも、よみてましや。

けふは、風波もなきたるに、外のさはり有て、猶此湊にありといふ。さるのどけき海上に、初春」上弦の月の、かたぶきたらん、めづらしくも、あはれならんに、まだき隠れんとするを、あかず見て、業平朝臣のうたを思ひ出られたる也。かの哥の本の句、「あかなくにまだきも月のかくるゝか」といふが今宵のけしきにかなへるより、「山端にげて」の末句のうちあはぬをもどかしみて、「かの朝臣も、もし其月、こよひのごとき海邊にて望まれしならば、波たちさへていれ」ずもあらなんとこそよまれめ」と、いへり。さのみいはずても有べきを、出るがまゝに評せらるゝも、ひたすらまめだつ方にやらじとせる例のしわざ也。

いま、このうたをおもひて、ある人のよめりける

てる月のなぐるゝみればあまのがはいづるみなとは海にざりける　とや。

「月の行へを見れば、波にこそいれ。さらば天上の」銀河も、流れいづる湊は、やはり此世界の海ばらにざりける」といへり。「みなと」は、水門にて、海と河との界をいふ。「とや」は、「とか

や」といふ意にて、「ある人」とおぼめきたるをうけたる也。

九日 つとめて、おほみなとより、なはのとまりをおはんとて、こぎいでけり。これかれたがひに、くにのさかひのうちはとて、見おくりにくる人、あまたるなかに、ふぢはらのときぎね、たちばなのすゑひら、はせべのゆきまさら、「みたちよりいでたうびし日より、こゝかしこにおひくる。このひとぐゝの、ふかきこゝろざしは、このうみにもおとらざるべし。

これかれ入たがひて、かはるぐゝにくる也。國のさかひを出ぬうちは、いまだこなたにある人なれば、尋ねずては有べからずとて、猶見おくる人絶ずといふ。其あまた有中にも、此人々は、御館を出づる日より、こゝの湊、かしこの泊に追来て、別れ」がたくすと也。廿二日、発船の日、「藤原のときぎね、船路なれど馬のはなむけす」といひ、又、廿七日、はじめて浦戸にとまられし夜、「藤原のときぎね、橘のすゑひら、こと人々追来たり」とあり。ときぎねは三たび、すゑひらは二たび、ゆきまささはこゝに一たび出たれど、猶みな、しばぐとぶらひたるべし。五日六日の間、「人々たえずとぶらひにく」とも有。さて、これらみな土佐人也。廿三日に正しき餞したる八木のやすのりが黨タツひの重き者にはあらで、常に召つかはれし國人のつらにて、ことに親しみ

深かりしなるべし。妙壽本には、言實、季衡、行政など眞字にて書れど、みなうけがたし。此外、眞字を加へられたるを見あつめて考るに、恐らくは、後のおしあてわざにして、據あるにはあらじとおぼゆ。よりにて、今とらず。「御館より出たうびし」とあがめいへるは、記者の女のかけるさま也。」さきに、「すむたちより」、「守のたちより」など書るは、自記のふり也。

これより、いまは、こぎはなれてゆく。これをおくらんとてぞ、この人どもはおひきける。かくて、こぎゆくまに／＼、海のほとりにとまれる人もとおくなりぬ。ふねの人もみえずなりぬ。きしにも、いふことあるべし。舟にも、思ふことあれど、かひなし。かゝれど、このうたをひとりごとにしてやみぬ」

おもひやるころはうみをわたれどもふみしなければしらずやあるらん

此、漕はなれ行今はの限りを見おくらんために、このみたりの人は追付来たと也。上に、「奈半の泊をおはんとて漕出けり」とあるは、まづ、大やうを引すべて書たるものにて、まことは、只今こぎわかるゝ也。此つとめての船出にあへるは、夜をこめてぞ追きけん。まへの浦戸の泊も、夜中に」とぶらへるさま也。さて、漕行まに／＼、海づらに立どまりて見おくる人も遠くなりぬ。

さこそ、此船の中の人も見えなりぬべし。さは、岸にもきはめていひたき事有べし。船にも思ふ事あれども、いひやらん方なければ、其「かひなし」といふ。「見えずなりぬべし」といふべきを、「なりぬ」といへり。こは、いかにかきたりとも、船と岸との事まがふべきすぢなければ、こゝとわりのうへにかゝはらず、口調にまかせてたゞうかぶけしきを専らにせる也。「船の人も見えず成ぬ」と、かなたになりていふにて、遠ざかり行舟のさま見ゆるもの也。『古今集』に、「世のうき時の涙にぞかる」などあるも、「涙にぞかるべき」といふを、只「かる」といへる、此類少からず。況や、今は、次なる「いふ事有べし」の「べし」にたゞみてきかせたれば、実は「なるべし」の意ならん事、いと論なし。かくも調を「いたはりて、ことわりをかへり見ぬは、いにしへの常也。さて、かひなしとは思へど、猶あらねば、此哥をひとり言にいひて、さてだに「やみぬ」と也。前にも、「守のたちより、よびにふもてきたり」などある如く、ふみだにあれば、いかにへだてし人の心もしらるゝものなれど、今わが思ひやる心の使は、たゞ海路をわたり行ばかりにて、其書なければ、かばかり悲しき思ひも、さきには、えし」らざらんといふ也。

かくて、うたのまつばらをゆきすぐ。そのまつのかず、いくそばく、いくちとせへたりとしらず。も

とごとになみうちよせ、えだごとにつるぞとびかふ。おもしろしとみるにたへずして、ふなびとのよめるうた

その松原の松のかず、幾ばくあらんをしらず。かつ、其陰ものふりて、いく千年かへたらん、しられずといふを、むげに打はぶける筆つかひ、只ならんや。勝景にあたりて、経にけん世をなつかしむは、風人の情也。しか、神さびたる松が根ごとに、浪のさやかに打よせたる、其うへにむれゐる鶴の飛かひて枝うつりせるなど、憂世の外のこゝちすらん。其真景、鏡にうつるが如きを見るべし。「船人」は打まかせては、舵工をいふ事論なし。されど、こゝは紀氏みづからをいひて、「此哥は所を見るにえまさ」らず」など、例の、いひ落せり。後にも、「舟のをさしける翁」とかけり。「舟長」も「舟士」の称也。又、記者の方になりては「船君」ともいひて、かく書まどはすが此記のこゝろ也。

見わたせばまつのうれごとにしむつるはちよのどちとぞおもふべらなる　とや。このうたは、ところをみるに、えまさらず。

打わたしたる松のうれに、立馴てもすむつるは、やがて、其松を、ちよへたる友とのみ、たの



み思へるさま也といふ。「うれ」は末にて、梢といふにかはらず。「どち」は、語のもとどちらなる意より出て、今「どし」と転じて、「男どし」「女どし」、或は、「兄弟どし」「いとこどし」などいふ「どし」也。同じほどの物の對<sup>ムカ</sup>へる称にて、やがて親しむ方になれり。「べら」は、もと、「可」の語ながら、「べき」「べく」などいふには異<sup>カヘ</sup>りて、その様子を含める詞也。今をも、思ふさまなると」解して、粗々かなふべし。俗に、「さうな」「やうな」などいふに近し。「えまさらず」は、『抄』に「絶景、哥にも形容しがたきなるべし」といへり。

かくあるをみつゝ、こぎゆくまに／＼、やまもうみもみなくれ、よふけて、にしひんがしもみえずして、てけのこと、かちとりのこゝろにまかせつ。をのこも、ならはぬはいともこゝろぼそし。まして、女は、ふなぞここにかしらをつきあてゝ、ねをのみぞなく。」

さるけしきの見えずなりゆくはさらにて、大やう、山も海もひとつにこめて暮わたり、いはんや夕月も入はてゝ、東西わきがたき深夜の海上に、たゞてけのこと櫂取の心にまかせたる船中の心ぼそき、ならはぬ人は、いかにあらん。実に、女は打かづきて、音もたてつべし。よるの渡海は、今宵はじめなれば、ことさらなりけん。「てけ」は、天氣にて、晴雨風波のうへをさせり。」

かくおもへば、ふなこ、かちとりは、ふなうたうたひて、なにもおもへらず。そのうたふうたは、はるの野にてぞねをばなく、わかすゝきにてきるゝ、つんだるなを、おやゝまぼるらん、しうとめやくふらん、かへらや、よむべのうなぬがな、ぜにこはん、そらごとをして、おぎのりわざをして、ぜにももてこず、おのれだにこず。

かくくるしく思ふに、これを常とせる舟子櫂取は何ともおもはで、あるゝ夜風にうそぶきうた「ふらん。中々、あはれにも、又をかしとも聞ゆかし。さて、其哥は、田舎人の鄙言のまゝならんがうへに、しらべのまにゝいたく言をはぶきていひつらねたるものなれば、いかでしかとは聞とらるべき。推あてに其意ばへをいひ試んに、まづ、此「春の野にてぞ音をばなく」の發句は、其野に出て歎きをるさま也。「ねになく」は、たゞ聲をたてゝ泣事のみにあらず、そのかみは、打くどき歎くをも皆おしこめ」て「音なく」といふめり、外に辨あり。やがて、「なげき」の語も「長息」なれど、「息つく」をのみいふにはあらぬが如し。さて、其人の歎くをきけば、若薄にてかくも手をきるゝ、からうじて摘来たる菜を負にしおきて、もて帰りし其うなぬが親や、うまき菜なりとたうべらん。其親の姑やくふらん。ねたき物から、そは、とまれ其よべのうなぬ来たれか

し。かのあたひの錢乞とらん。「今やがて」と偽りて、「そしらぬかほに、けふもてこず。其錢なくは来てもことわらんを「おのれだにこず」と也。「かへらや」は、今の船哥に「やんれな」といへるが如き其ふしの拍子なるべし。後の舟哥のはてにもいへり。「まぼる」は、「まゐほる」にて、好みくふ事にて、嗜の字の意などにあたりて、「粥をまゐる」「菓物まゐりて」などの「まゐ」にて、たうべる方の「まゐ」なるを、「まうほる」とも「まぼる」ともいひし也。「まゐほる」の「まぼる」と約ま<sup>マキデ</sup>れるは、「参出」を、「まで」といふに同じ。さるは、あがめたる語なれど、此句、親といふより、いひおろしたれば、「まぼるらん」と謡はん、又、にげなきにあらず、「親やまゐらん」の意也。『大和物語』に、「わかき時に親は死ければ、をばなん、おやの如く、わかより相そひてあるに、此をばの御心のさかしくあしきを云々」とあるも親といひ、姨といふより、御心などあがまふ方にも書なすめるは、文勢の自然也。すべては、只「をば」の心のさかしく「など有べき所が、前にも、講師といへるより其尊称を更て、「出ませり」と書るなど思ふべし。『空穂』の藤原の君の巻に、「かくて臥給へる程に、まうほる物、日に橘一つ云々」、又、「いさゝか物まうほらで、日ごろへぬ」など有も、「まゐほる」にて、おとゞの病中に、たゞ橘一つを好み

まゐり、又、「すこしの物もまゐり給はで」といふ也。諸注、此「まぼる」を、むさぼる意と思へるは非也。「むさぼる」は、筋なく物をほしがる事にて、尤、食物に限る「べからず」「貧」の字の意よくかなへり。やがて物語の文を、「むさぼる物、日に橘一つ云々」、「いさゝか物むさぼらて、日頃へぬ」などいはれんやは。かなはざるを知べき也。「おぎのりわざ」は、今も西國にて、俗に「乗打をする」などいふ所を、「沖を乗る」ともいへり。もし、此語、むかしのまゝの方言ならば論なく、此意をもて解べし。さるは、よべのまゝにて、音もせず、よそにしてよりつかぬを、沖のり業といひて、尤舟子の哥」にたよりあり。「貰」「貸」などの字を、おぎのりとよむ意ならんには、「そら言をして、錢もてこず」といふにてたれる也。ことさらに、又、「おぎのりわざをして」と重ねいふべきに非ず。見わくべし。附注本に、「わかすゝきにて」と、「て」文字あるに従ふべし。

これならずおほかれど、かゝず。これらを、人のわらふをきゝて、うみはあるれど、こゝろはすこしなぎぬ。

夜、たゞうたふ中には、これのみならず猶をかしきも「多かれど、さのみはかいつけずと也。こ

れならず、外に哥へるをもうけて、「これらを」といへり。これを人の笑ふを聞て、限りなき心ば  
そさもいさゝかなぐさむといふ。直に、此哥をきゝてといふにあらず。わかき女子どもは、さば  
かりならぬ事をもねんじかねてをかしがるを、もらひわらひする也。心のなきぬるにあはせて、

「海はあるれど」ゝいふ。

かくゆきくらして、とまりにいたりて、おきなびとひとり、たうめひとり、あるがなかにこゝちあ  
しみて、ものものしたばで、ひそまりぬ。

さて、今日は、日ごろにたがひ、「かく漕行くらしてとまりぬ」と、立かへりていへる、大くゝり  
の文なれば、上に「山も海もみなくれ、夜更て」などいへるも、此「くらして」といふにこもれ  
る也。「おきな」は、もとより老夫の称、「たうめ」は、老女をいふ。すなはち、「おきな」は紀氏、  
「たうめ」は淡路のたうめ也。後に、「かの船酔の淡路の嶋のおほい子」とかけるも、今をうけ  
て「かの舟酔」といへり。翁を、「おきな人」としもいへるは、他よりいやしめずいふ詞也。『枕  
草子』に、「其かたはらなるおきな人たちも、打すてつゝ」などあり。此二人、中にもわきて、舟  
こゝちあしくして、物をもたべずして、其まゝ寝られたりといふ。「あしみて」は、「楽しみし

て、「苦しみて」、或は、「うとみして」などいふにかはらねど、今俗にいはねば耳遠きのみ。「ものものしたばで」は、物もた「べ給はで也。「ひそまる」は、ぬる事にて、今「しづまる」といふに同じ。其「しづまる」は、あがむる語なれば、今は、「御しづまり」とのみいひなれたり。いづれ寝る事を、さしつけにいふを憚られる意也。「潜まる」は、其かたちにつきていひ、「静まる」は、其けはひによりていへり。今俗に、「物もめしあがらで、おしづまりぬ」といふにて、しか己が事をみづからあがめいへるが、例のをかしき也。」

十日 けふは、このなはのとまりにとまりぬ。

昨日の舟酔をいこひて、とゞまれるなるべし。「けふは」といへる語勢、しか聞ゆ。

十一日 あかつきにふねをいだして、むろつをおふ。人みなまだねたれば、うみのありやうもみえず、たゞ月をみてぞ、にしひんがしをばしりける。かゝるあひだに、みな夜あけて、手あらひ、れいの事どもして、ひるになりぬ。

船中の人、みないねたるほどにて、苦などもいまだ「あけわたさねば、海の有さまも見えず。落月の、ひまなどよりさしいるを見てぞ、わづかに東西をばしると也。かゝるほどに、月も入はてゝ

後、やうく残りなく明ゆく夜のさま、けしき見ゆめり。「暁に船を云々」は、まづ何はおきて、當日舟の進退をむねとすれば、威初に書出るが、此記の例也。さきの廿七日、廿八日、また九日、後の廿四日の所など引合せて、しるべし。今も「西東をばしりける」といふまでは、いまだ「漕出ぬさき也。十一日の月、暁まであるべきならねば也。「かゝる間に」といふよりを、漕出ての後とすべし。まづ、手洗ひて、さて髪あげ湯あみして、佛神を禮し、或は食事をなすなど、みな「例の事」といふべし。かくするうち「昼になりぬ」といふ。短日のさま也。大よそ、毎朝の所作なれば、「例の事」といへり。さて、かゝる事ども、筆のたよりにまかせ、事のついでに随ひ、おくれすゝみてところぐに書出る」が、日記の常也。

いまし、はねといふところにきぬ。わかきわらは、このところのなをきゝて、はねといふところは、とりのはねのやうにあるといふ。まだをさなきわらはのことなれば、人々わらふときに、ありける女わらはなん、このうたをよめる

「いまし」は、「今」に「し」の助字そへるなれば、「今」とのみいふに、意はかはらず。もはら當世にいひなれし言とみゆ。「いまし」は、やがての意にかよへば、後には「乃」の「字」などを「い

まし」とも訓<sup>コト</sup>せたり。さてしも、「し」をそふるは、軽き語をしづむる格にて、『古今』に、「今しはと侘にしものを」などある、同意也。今俗なる女文などに、「今日し」、「夕し」など書り。稚きわらは、この所の名を聞て、此はねといふ所は鳥の羽根の形のやうにあるやとふを、まだ、いはけなき事なれば、げにも、しか思ふべかめりと、有あふ人笑ふ也。時に、同じくそこに有けるめのわらは、此子の言につき「て、この哥をよめりといふ。

まことにて名にきくところはねならばとぶがごとくにみやこへもがなをとこもをんなも、いかで、とくみやこへもがなとおもふこゝろあれば、このうたよしとはあらねど、げにと思ひて、ひとぐわすれず。

今「はね」と名にきく此所、このわらはのいへるがまことにて、実に鳥の羽ならば、それを得て、空とぶ如く此船はやく都へいたれかしといふ。男女の差」別なく、いかでとく都へと願ふ心なき人なければ、此哥、とりしめもなき歌なれど、さる時にはまりて、げにさこそあれと思ふより、結句打ずしつゝ、人々えわすれずと也。さて、按ずるに、「いかでとく都へもがなと思ふ心あれば云々」とある「もがな」の三字、決めて衍文にて、本は「いかでとく都へと思ふこゝろあれば」



とぞ有つらん。「とく都へもがな」といふは、其意通ぜぬ事にて、有まじき語也。都へ入が「遅からんを、早く」と願ふ意ならば、「都へとくもがな」とか、「はやくもがな」とか、下上に打かへさずは語をなさず。よし、世にある語にもせよ、「とく都へもがな」といひては、「もがな」の詞、「都へ」といふにおもくかゝりて、「とく」といふまでには立及ばねば、たゞ「都へもがな」とばかりの意に聞ゆ。「都へもがな」といふばかりは、とても都へは入べからざる人の願ふ詞にて、今には更になはざる也。哥の「都へもがな」は、「翅を得て、飛が」如くに都へ入よしもがな」と願へるにて、「もがな」は専ら、「飛が如く」にかゝりて、「虚空を飛行して」と世にあらぬわざを願へるなれば、かなへる事論なし。一つに思ふべからず。「もがな」の三字、ある時は口調もとゝのはざるを聞知べし。哥の末の「都へ」といふがひとしければ、ふとまぎれ入たる也。

この、はねといふところとふわらはのついでにぞ、またむかしのひとをおもひいでゝ、いづれのかゝるゝにかわ」するゝ。けふはまして、はゝのかなしがらるゝことは、くだりしときのひとのかずたらねば、ふるうたに かずはたらでぞかへるべらなる、といふことをおもひいでゝ、人のよめる

此所を、鳥の羽のやうなる所かたとひけるわらはの、いはけなきがおかしう、いみじきにつけて

も、むかしの児の、同じほどに物いひ、愛きやうつきたるを思ひ出ても、したはるゝかな。こは、いかな」る時にかわするゝ、更にわするべきひまなし。さるだにあるを、今日は、ましてその母親のなしみ恋らるゝ事のわけは、一とせ下りし時の人の数のうち、こたび一人たらざれば、ふるき哥に、「北へゆく雁ぞ鳴なるつれてこし数はたらでぞ帰るべらなる」と、田舎へ下りて、男におくれて、女ひとり京へ帰る道にてよめる事あるを、似たる別れに思ひ出て、ある人、此しかぐの哥を、けふ」しも打あはせてよみけるが故に、かく悲しまるゝ也といへり。さる意ばへを、やがて哥へいひつらねたれば、其すぢ聞とり難きに似たり。この哥ぬし、やがて紀氏ならんには、打まかせたる歎きを、母のみに托せられし也。

よのなかにおもひやれどもこをこふるおもひにまさるおもひなきかな　といひつゝなん。

諸本、二句、「おもひあれども」とあるに従ふべし。「憂世の中には、さまぐの思ひありといへども、子を失ひて、こひこがるゝ親の思ひに似るべき思ひなしといへり。「思ひあれども、思ひなきかな」と、をりあへるがわざとならず。いみじき也。しかいひつゝ、なきかなしむといふ。

十二日　あめふらず。文時、維茂がふねのおくれたりし、ならしづより、むろつにつきぬ。

「雨ふらず」は、終日降べきけしきにて、さなが「らくれしをいふ。さるから、船出せざりしといふ意こもれり。かつ、此十二日より廿一日まで、此室津にとゞまりをりて、さばかりくるしまれし大あれの催しなれば、かくもふらぬさきより、いみじく書出られたり。さはいへ、雨ふるとはいふべく、「雨ふらず」とは打まかせたる文にあらず。こればかりも、戯れのうちなるを見知べし。文時は紀氏の息、時文也。打かへして書れしは、例のにて、すべてのあざ」れはいふもさら也。末に、おのがうへを「土佐に住ける女」とまで書たがへられし中に、世にしるき我子の名をしも其まゝ打出んは、おぞかりぬべし。『枕草子』に、清少納言がもとへ行成卿より贈られしあざれ文に、行成の名を「なりゆき」と打かへして書れし事など、思ひあはずべし。維茂はたれならん、しられず。源是茂の文字をかへたるにもあらじ。此人、随従すべき」いはれもなきにや。時文の弟などにや、考ふべし。さて、ならしづにておくれし船の、室津に落あひて、紀氏の泊と一所になりぬる也。紀氏も、曇天にことよせて、此舟をまたれしなるべし。こは、屬船の類ひならで、紀氏の妻妾幼童の一族を、かの兩人守護して乗られたる船なるべし。すべて、國人の名をばことぐく記されたれど、都方の人の名を書れたるはなし。さるは、さらでも大やうしるければ、

例の「打かすめたる也。「淡路のたうめ」は、此限りにあらざる事、後に辯ぜり。さるに、こゝに「文時、維茂が船」とうち出られたるは、彼副船のうへをば、かくいはんの外、たやすき書かたなき故なるべし。又此名のみ例にたがひて眞字にてしるされたるは、漫りに打かへして、実は、まことの名ならねば、仮字にて「ふんとき」など書れんには、「時文」をかすめたるしわざ也とも、誰かは思ひよるべき。されば、わづかに文字の上」にてだにさとらしめんが為也。維茂の名も同じかるべけれど、しるによしなし。

十三日のあかつきに、いさゝかに雨ふる。しばしありてやみぬ。をとこをんな、これかれ、ゆあみなどせんとて、あたりのよろしきところにおりてゆく。うみをみやれば、くもゝみななみとぞみゆるあまもがないづれかうみととふて<sup>ひ</sup>しるべく。となん、うたよめる。

こゝのみ、例にたがひて、「十三日の」と、「の」ゝ言をしも「入たるは、前日をうくるの文にて、昨朝よりの雨、やう／＼今日の暁がたにすこし降出しと也。さて、それも降とげずして又「やみぬ」といふ。こゝにて昨日の「雨ふらず」の一句、をりあへり。さらでは、かたみに文をなさず。心をつくべし。「いさゝかに」といへる「に」文字、後世いひなれざるをもて疑ふべからず。次に

も、「雨いさゝかにふりて」前にも、「いさゝかに物にかきつく」などいへり。其外、「ひねもすに浪風たゝず」などもありて、みな「に」文字なくとも同じ事也。常にも、「わづか」を「わづかに」、「はるか」を「はるかに」などいへる「に」に同じくて、事をしづむるのてにをは也。さて、明日十四日は、齋日なれば、妻子はさらにて、男女さるべきかぎり湯あみせんとて、暮るを待て、船よりおりたちゆく也。磯陰の、たよりよき所に芦などをりふせて、小屋めくものさしかけたるべし。「いほりさし」、「いほ結ぶ」などいふ、當時のさま」也。さて、歩み行ほど、海上をかへり見てよまれし歌也。「中空にたゞよふ雲も、みな、白波の色とぞみゆる。こゝにをらん海人もがな、いづれの方か海原ならん、とひてしらんずを」と、夕まぐれのおぼつかなきけしきをいへり。「とふて」は、一本、「とひて」とある、正しかるべし。又、「となん哥よめる」の一句、外にたがひて、いとつまりて手づゝに聞ゆるは、聞なれたるが故也。いにしへは、詠吟する事を「哥よみ」と躰言にいへるより、「哥よみして」、「哥よみせん」など常にいへれば、今もしか書るにて、「となん、よめる」といふに同じき也。

さて、とをかあまりなれば、月おもしろし。ふねにのりはじめし日より、ふねには、くれなゐこく、

よききぬきず。それは、うみのかみにおちてといひて、なにのあしかげにことづけて、ほやのつまのいずし、すしあはびをぞ、こゝろにもあらぬはぎにあげてみせける。」

既にみちなんとする月の、とく海上にあらはれて、てりまさりゆくものから、おぼろだちて雨氣アマケつきたる空なるべし。さるは、中々にのどやぎて、いさゝか春めける日の夕つかた、実におかしかるべし。さて、船に乗り日より、色めきたるはもとよりにて、すべて、よきかたの衣をばきず。其故は、かの龍神の見いれて、たゞりなさんがおそろしさになごいひつゝ、その芦陰に「よりて、ものせると也。女どもの衣ぬぎつゝ、其衣のうへの心にまかせぬを、語りあふさまをいふ。たまゝ、陸をあゆみて、衣裳など、めにつくべき事也。なにのあしかげ」は、いづくときさゝず、「そこらあたりの蘆陰に」と打こめていふ意ばへにて、『伊勢物語』に、「此女おもひわびて、さ」とへゆく。されば何のよき事と思ひていきかよひければ、皆人きゝて笑ひけり」とある「何」に同じ」格也。俗語に、「なんでもよき事なり」、「なにかそこらならん」などいへるに似て、何くれをとはず、おのれ吞込くみこをる意ばへ也。物語のも、「なんでもよき事と思ひて」といふ意、今も、「なんでも芦陰にことづけて」といふ意にて、すなはち、上にいへる「あたりのよろしき所」をさす。

委しくいへば、「なにかそこらの芹陰に」といふにて、わざとおしあてにおぼめくも、次なるいみじき」あざれをほのめき出んの料也。「事づけて」は、「事よせて」にて、それによりてといふ也。

「ほやのつまの云々」は、其女どもの陰所のあらはるゝを形容せり。保夜は、色も形も其まゝ女陰の如きものにて、「ほや」の「ほ」は、すなはち、「陰上」の「ほ」也。すべて、「ほ」は、ふゝめる物の称と知べし。やがて、これを西國にては海玉門といふ。他國にて、貽貝を「東海婦人」といふにあへり。況や、鮎となし」たるは、打みだれて、今一きはかよひぬべし。『主計式』に、

「貽貝保夜交鮎」、また、「貽貝富那交鮎」

イカイホヤノツマスシ  
イカイフナノツマスシ

と見えたり。鮎も、似たりといふべし。これも『齋宮

式』『主計式』等に、「鮎鮎」

スシアはヒ

とあるにて、鮎となせる鮎也しが、鮎になす鮎は、決めて、其形小

にして耳がちならんには、いよく女陰おぼゆべき也。其鮎など、もてはやさるゝ世には、常に似たる物としつらん。今も、あざれに「赤貝」といひ、「松蕈」な」どいへば、やがて女陰男根に思ひとらるゝ如きの類ひなりかし。おそろくは、此二物、正月の式に用ふるものならんには、時にあへるあざれにて、尤をかしき也。いま、数子釣鮎などいはんが如し。「いずし」は「飯鮎」の意にて、只、「すし」とのみいはんに同じ。今も、備中備後のあたりにては常にしかいへり。「交

鮎「は、「あつめすし」の意なるべし。「あつめ」を「つめ」といふは常にて、「つめ」を「つま」といふは鮎とつらな」る音便也。「爪<sup>ツマノコト</sup>琴」、「弾<sup>ツマハシキ</sup>指」の類の如し。さるは、数品まじへ物するならんに、「ほやのつまのいずし」とある、たゞ、保夜ばかりにては「交<sup>ツマ</sup>」の義をなさず。飯と交る事とも見がたし。よりて按ずるに、此「つま」といふは、もはら此所に緊用の語なれば、常「交鮎」といひなれたる名称にまかせて、その心までをばおさぐる也。さらば、又、たゞ「つますし」とあるべきを「つまの云々」と、「の」もじをくはへてことさらにいへるは、かの妻のゆかりをたしかに聞せんと也。さて、「つまのすし」を「いずし」といへるは、口調にまかせたる也。飯に心あるにはあらじ。只、此文は、「ほやのつま」といふ一句が滑稽のかなめなるを、聞しるべし。近世の小説中に、膳部の吸物を、「すいの物にて候」と答へし事あり。「すいの物」の「すい」は、俗に、心きゝたるを「粹<sup>スイ</sup>」といふ「すい」也。「吸物」を「すいの物」といふいはれなけれど、さる方に聞せんとの戯れ也。今も、「交<sup>ツマ</sup>鮎<sup>スシ</sup>」を「つまの」ときりて、妻<sup>ユメ</sup>の浴を思はせたる心ばへ、准ふるにたれり。まことは、「妻の保夜」といふべきなれど、さるは、今俗に「女房の赤貝」といはんにひとしく、打つけに陰所の事と聞えていとまばゆければ、幸ひに「つますし」の名を



かりて、下上にいひくだして、あらはならず打かすめたるが、みやびにをかしきなるべし。もとより実の鮭をいふにあらで、只、其名をかれるのみ」なれば、いさゝかのことわり差はんをばかへり見ず。いはんや、此章、いみじともいみじき滑稽ならんには、聴人、心して、只匂ひくるかをりとれと、打はなれて書ながしたるもの也。「はぎにあぐ」は、もす或は袴など脛までかゝげ上るをいふ也。それをうつして、何によらずあらはに物を見することを、ざればみては「はぎにあぐ」といひけん。今の鄙言に、「隠す事をいひあらはす」を、「尻」をまくる」などいふに似たり。さて、當時、兼輔卿「七月六日に、たなばたの心をいつしかとまたぐ心をはぎにあげて天の河原をけふやわたらん」とよまれたるが『古今』にみゆると、此日記の外には、かゝる所につかへるをいまだ見ず。しかも、これらみな俳諧なれば、一時の俚言なる事しるし。これを、今は、女の脛あらはなるにいひよせたり。さるは、見せんとしてみるならねば、「心にもあらず」といふ。もとより夜陰にして、さる物陰の湯あみ、外より見ゆべきならねど、女どちは打こみて、隔てあへぬさまを思ひはかりて、彼女の方になりていふ也。よにあまりしきあざれを、かくもみやびにしらべあぐらんは、おぼろけのわざならず。見だにあやまつことなかれ。

十四日 あかつきよりあめふれば、おなじところにとまれり。ふなぎみ、せちみす。さうじものなけば、うまと」きよりのちに、かちとりきのふつりたりしたひに、ぜになければ、よねをとりかけて、おちられぬ。かゝることなほありぬ。

をとつ日よりもよほして、きのふいさゝか降し雨、この暁ぞまことに降出て、数日あれたる也。『抄』云、「ふなぎみ」は、其船中の主君にや。紀氏をいふべし。「せちみ」、妙壽本に、節忌と書たまへり。精進の事也。「さうじもの」は、すなはち精進の食」物也。十四日、齋日也。ことに正月、五月、九月は、年三とて、持戒精進して一切の罪を消滅すべきよし、佛書に侍り云々。又云、「よねをとりかけて」は、米にてとりかへ買たる也。「おちられぬ」は、船君の、船中不自由にてさうじものなき故に朝精進ばかりにて落られし也といへり。「鯛」は、昨日のなぎにとゞまりてあられしなれば、楫取ら幸ひのいとまを得て釣たる也。今日は、あるゝのみならず、齋日なれば、殺生をば禁ぜらるべし。さて、便利にまかせて、米にかへられたるを「銭なければ」といひなし、「かやうの事猶あり」とまでいひあらはせるなど、皆すべて俳諧也。これを、精進を遂られざりし事、たび／＼ありといへるに見るべからず。さて、「よねにかへて」などいふべきを、「よねを

とりかけて」といへるも、決めて當時の戲言ならめど、今しられず。」

かちとり、また、たひもてきたり。よね、さけなどくる。かちとり、けしきあしからず。

又もてきたるも、昨日つりおける鯛なるべし。「くる」は、「くるゝ」にて、「くだしあたふる」也。

『抄』云、「けしきあしからず」は、機嫌よき也。

十五日 けふあづきがゆにず。くちをし□

『抄』云、『拾芥』云、『世風記』云、正月十五日亥時、煮「小豆粥」、為「天狗」祭「庭中案上」、則其粥凝時「向」東方「再拜長跪、服」之、終年無「疫氣」といへり。さて、「けふあづきがゆにず」とある此書さま、例の也。「けふ小豆がゆ煮る」とは書べし。其「煮る」といふべき語勢をくじきて、「煮ず」といへるが俳諧也。「けふあづきがゆにず」といふ文はあるべからざるを聞しるべし。

もし煮ざる事を実に書んとならば、かきさま猶あるべく、又、煮ざらんならば、これのみ書ずても有ぬべし。正「月」の式、すべて何事もせざらん、小豆粥をしも取わきて「煮ず」と書出たるが、をさなめきたるに、重ねて「くちをし」とさへいへるが愚かに、をかしき也。前に、「十二日雨ふらず」とあるに同じしらべのあざれ也。「くちをしく」の、「く」文字は、決めて衍字也。古

仮名の「し」文字のなだりたるを「しく」とよみ誤てるなるべし。また「あづきがゆにず」といふより、俳諧なる事を聞しらず、是ばかりに「くち」をし」といふべきいはれなしと見て、後に「く」をくはへて次の文につらねたるにや。されども「くちをしく、猶日のあしければ」といふこと、有べうもあらねば、いよ／＼通ぜぬ文となれり。

猶日のあしければ、ゐざるほどにぞ、けふ、はつかあまりへぬる。いたづらに日をふれば、ひと／＼うみをながめつゝぞある。めのわらはのいへる

たてばたつみればまたゐるふくかぜとなみとは」おもふどちにやあるらん　いふかひなきものゝいへるには、いとつかはし。

立出しより、日のみあしければ、ゐざるやうにて、すこしづ／＼漕くるあひだに、「今日は、はや廿日余り経たり」と、来たる舟路はわづかにして、日数のみ重なるを歎く也。かくいたづらに日をふれば、たゞ海上をのみ皆打ながめつゝ、くらしをるといふ。「ながめ」は、思ひありて打まもるさ」ま也。しか、つら／＼見をりてある童女のよめりしといふ。よき中らひは、たつにもゐるにも離れぬものなるを、浪の縁より思ひよせて、風波の相ともなるは思ひあひたるどちにやといふ。

さるは、風波の日をふれど、共にたちゐのやまざる方よりいへり。さて、こは、風たてば波もち、風ゐれば波もゐるといふ意なれど、風はもと形なければ、「やむ」とはいへど「ゐる」とはいはれず。さるを、「かくもよめるは、波の「ゐる」といふかたにもたれたる也。次に、「雨風ふかず」、また「風波たかければ」などいひて、前にも、「日ひと日、夜ひと夜」といひて「明にけり」とのみうけたる、皆、かたへにつきていへり。さて、意、詞をさなくて、浅し。なれど、もとよりわらはべのよめるなれば、それ相應也と、たすくるかたにいへり。「いふかひなき」は、「数ならで言にもかゝらぬ」をいふ。

十六日 風なみやまねば、なほおなじところにとまれ」り。たゞ、うみのなみなくして、いつしかみさきといふ所わたらんとのみおもふ。風なみ、とにゝやむべくもあらず。

「みさき」といふは、此室津より、さきの泊までのあひだにて、廿一日、津出船の日に通られし所なるべし。余り久しく同じとまりの風波にくるしめば、一泊にても漕出んの心より、たゞ波ををさめ、そこだに早くわたらんとのみ、こひねが」ふ也。さるに、中々、急に止べくもあらずと云。「いつしか」は、「いつか」<sup>く</sup>といふばかり、「はやく」といそぐ意也。只「いつか」といふ

にはたがへり。次にも、「わらはもおきなも、いつしかと思へばにやあらん」とあり。「とに」は、「頓<sup>トシ</sup>」なるべし。こは「蘭<sup>ラン</sup>」を「らに」、「錢<sup>セン</sup>」を「ぜに」といふ格也。されど、「頓」は、當時、「とみ」とのみつかひなせり。さるは、「文<sup>ブン</sup>」を「ふみ」、「蟬<sup>セン</sup>」を「せみ」といふに同じ。妙壽本に「ともに」とある方にやとも思へど、上の「いつし」かわたらん」といふには「頓にやむべくもあらず」とあるぞ、語調ともなへるにや。「風波ともに」といはんは、いとぬるきこゝちす。

ある人の、このなみたつをみて、よめるうた

霜だにもおかぬかたぞといふなれどなみのなかには雪ぞふりける　さて、ふねにのりし日より、けふまでに、はつかあまりいつかになりにつけり。

更に、霜もおかぬ南方暖國の海濱也といふな」れど、たつ波の其中には、さしも雪こそふれと、かねて聞おけるを、疑ふかたにいへり。「方ぞ」といふに「瀉」をそへたり。『抄』云、文集に誰云南國無「霜雪」、盡在「愁人髻髮間」云々、此本説を用ふ。白波を雪に見なして、「雪ぞ降ける」とよめる、下句也といへり。「ふねに乘し日より云々」は、十二月廿一日より正月十六日まで、廿

五日也。

十七日 くもれる雲なくなりて、あかつきづくよいと」もおもしろければ、ふねをいだしてこぎゆく。このあひだに、雲のうへもうみのそこも、おなじごとくになんありける。うべも、むかしのをのこは、「さをはうがつ、なみのうへのつきを。ふねはおそふ、うみのうちのそらを」とはいひけん。きゝされに、きけるなり。

こよひ、めづらしく夜半の後晴わたりて、いまだ満たる暁月の面白きにうかれ、かつ、日頃待侘し船出なれば、明るをまたで漕出し也。「此あ」ひだ」は、例の發語にて、あらためて今宵の賞景をいふ也。「雲の上」は、「海の底」に對していへるにて、只大空をいふ。かの、水やそら、空や水ともといひ、撃<sub>二</sub>空明<sub>一</sub>兮<sub>二</sub>沂<sub>二</sub>流光<sub>一</sub>など歌ひし夜のさま也。「をのこ」は賈島をさす。『附注』云、『詩人玉屑』十五云、高麗使過<sub>レ</sub>海有<sub>レ</sub>詩云、水島浮還没、山雲斷復連、賈島詐為<sub>二</sub>梢人<sub>一</sub>、聯<sub>二</sub>下句<sub>一</sub>云、棹穿波底月船厭水中天、麗使嘉歎久之、自<sub>レ</sub>此不<sub>二</sub>復言<sub>一</sub>詩といへり。さて、按ずるに、すなはち此詩をうたひあげし也。いつも詩とだにいへば歌ふなるを、今夜しも、などうたはざるべき。哥さへ数ありて、しれたる夜のさまなれば、中々に「うたふ」といはざる也。さて、波底

を「波上」とし、水中を「海中」とせる、皆、字訓のこゝにかなはずして謡ひがたきより、然と  
りかへて調をなせるもの也。かく「波のうへの月」、「海のうちのそら」と歌ひてこそは、今夜」  
のしらべにかなひ、却て詩情もうかぶべけれ、両句の末なる「上ウヘの月」、「中ウチの空」の「う」の聲  
は、「波の」、「海の」ゝ「の」の内にひゞきて、「波のへの月」、「海のちの空」と、ゆうになだら  
ぐもの也。「波のその月」、「水のなかのそら」など、其まゝとなへてよからんや。とゝのはぬを  
聞分べし。又、「船は厭オス」の「す」をのべて「そふ」といへるが、自然「襲オツ」の意に転ぜるがめ  
でたき也。「屠蘇」を「とうそ」とさへいたはりいへり。ましてや、今は歌ふなるをや。こゝは、  
皆、入聲を平聲にかへて、即ち、平調に謡はれたるなるべし。しか平調にしらべなせるは、水上  
にて謡ふが為にし、それ又、女の謡ふによし有ん事など、あまり幽微の論に落めれば、説のこせ  
り。さて、次なる二首の哥に至りては、又もとの「波底月」、「水中天」の意にかへりてよめり。  
心を付べし。按ずるに、後の句の「船はおそふ海のうちのそらを」とある終りの「を」文字はな  
くて、「海のうちの空とはいひけん」とあるらん」が、意も調もとゝのひて、かつは紀氏の文法に  
もかなへりとおぼゆれど、さる本もなければいかゞはせん。『附注』本には、即ち「を」文字なけ



れど、上の「波の上の月を」の「を」文字もともになければ、猶よりがたし。疑らくは、下の「を」文字のなきによりて、上の「を」文字も後に省きたるにやあらん。さて、此詩は、聞ざれにきけるなれば、決めて差ふ事有べしといふ。「聞ざれ」は、今俗に「聞かすり」、「聞はつり」といふにて、しかと正しく聞ざる也。「ざれ」の言は、やがて「あざれ」の「ざれ」にて、正実ならぬをいへり。されば、「去」<sup>サレ</sup>にて、物のさりはなれたる意より出て、「され頭」<sup>カウヘ</sup>、「され石」など、皮肉をはなれ、土沙をはなれたる称也。「風にさらし」、「水にさらし」などいふも、令<sup>サラ</sup>去の意にして、物の本性をぬくをいふにて、同語也。さるは、「ざれ言」、「ざれ業」も、常をはなれさりたる意なるを知べし。前にも、「から哥は、これにえかゝず」とある、同「じ意ばへにて、から哥など女のえよみうまじきものなれば、たゞ人の傳へを聞おぼえて、たしかならぬよしにいひて、今夜とりあへずうたひかへたるふしぐ」を、聞たがへのあやまちに書なし給へる、凡器の及ぶ所にあらず。かつ、其光をかすめて、千歳の末にたどらしむ、又、いみじとも、たふとからずや。昔のをのこがむち打て、馬のすゝまざればといひけんためし、おぼゆかし。「うべ」は、俗に、「なるほど」、「げにも」といふにて、此を「見て彼をさとり、今によりて昔をしるやうの所にいへり。今も、

昔賈嶋がうたひし夜の眞景にあひて、「然いひけんは、げにも」とめで興ぜる也。

また、あるひとのよめる

みなその月のうへよりこぐふねのさをにさはるはかつらなるべし

歌ひあげたる詩にあたりて、「又、ある人」といへり。是にても、詩をば朗詠せし事しるべし。たゞ古詩のうは「さしたるをのみうけて、「又」とはいふべきならず。前にも「から哥、聲あげていひけり。やまと哥、あるじもまろうども、こと人もいひあへり」と有。哥の意、「水そこの月の上をかくも漕わたる舟の、棹の末にかゝると見ゆる其影、きはめて月中の桂なるべし」と光のうちにさしかへすさまを、打みやりていへる也。「月の上より」の「より」は、漕わたるあひだをさしいふ言にて、『萬葉』に、「雲間クモマヨリ從狹徑サワタルツギノ月乃云々、從蘆邊アシヘヨリ湍來鹽乃云々、ヒトツマノ人都末乃ウマヨリ馬ユクニ從行オノツマノ尔カチヨリ己夫ユケハ之カチヨリユケハ歩カチヨリユケハ從行者云々」などいへる「從」の意に同じき也。後世、「こゝより」、「かしこより」などいふ「より」とは、豎横の差ひありて、いにしへはつかひざまの廣かりし也。『大和物語』に、「かたゐのやうなる姿なる、この車のまへよりいきけり」、「うつば物語」に、「いとかめしうて、此としかげの家のまへより詣で給ふ」とある「より」など、全く今と同じ。「月のかつら」は、『和名抄』

に、「兼名苑月中有<sup>レ</sup>河、々上有<sup>レ</sup>桂、高五百丈」などあり。」

これをきゝて、ある人、またよめる

かげみればなみのそこなるひさかたのそらこぎわたるわれぞわびしき

うつろふ影を見れば、水底、やがて虚空也。その中空にうかれても、漕わたるが侘しきと也。今夜の月明、賞すべしといへども、又、さるかたに物すみて、心ぼそきさまなるべし。「久方の」とおける枕に、一首のうへ静まりて、水中一面の大ぞ」から見ゆるこゝちす。初句の「影見れば」ゝ、即ち、大空の影也、月の影とおもふべからず。さて、これは、「船厭水中天」の意、前の哥は「棹穿波底月」の意也。されど、「棹はうがつ」といふに桂をさはらせ、「船はおす」といふを、空にあくがるゝさまに調べかへたり。後世、只句のおもてをよみふさぎてたれりとする類にはあらず。かくいふあひだに、夜やうやくあけゆくに、かちとり」ら、くろきくもにはかにいできぬ、かぜふきぬべし、みふねかへしてんといひて、ふねかへる。此あひだあめふりぬ。いとわびし。

月は照ながら、やう／＼しらみ行海上に、一むら雲の俄に出きたる明方のさま、見るこゝちす。さは、「今風吹出ぬべし。船とくかへしてん」といひもあへず、漕つけて室津に帰りたる也。はる

ぐ漕戻すほど雨ふり出て、舟もしどにしぶきけん。」夜のまのほどに引かへたるさま、げにも  
侘しかるべし。「御舟かへしてん」といへば、「船かへす」とうくべきあたりなれど、さるは口調  
をえざるより、「船かへる」といひてかへしたれば、「かへりし」といふ。ふたゝびのことわりに  
ていひおろせり。こは、「待いだす」を「待いづる」、「脱<sup>ヌカ</sup>せとる」を「脱<sup>ヌキ</sup>とる」などいふ格にて、  
たゝみてしらべをなす語言の常也。「此間雨ふりぬ」とは、其あひだのみふりて、帰るやいなやや  
みたる雨のあや」にくきをいへり。すべては、何事もいはで、只調のすみやけきうへにて、さし  
もあわてまどひけん急雨のさま、手にとるばかりのこゝちせるは、あやしからずや。おろそかに  
見る事なかれ。

十八日 なほおなじところにあり。うみあらければ、ふねいださず。このとまり、とほくみれども、  
ちかくみれどもいとおもしろし。かゝれども、くるしければ、なにごともおもほえず。をとこどちは、  
こゝろやりにやあらん。からうたな」どいふべし。

なほ、雨ははれたれど、風波あらければ、又とゞまれる也。きて、此泊、日数へて朝夕なれくる  
まゝに、遠く見わたせども、近くみやれども、いかにも面白し。されど、日頃さゝふる風波のく

るしければ、さばかりあかぬけしきにも、哥などよまんともおもほえぬを、男どしは、さすがに詩など作りて、うたひかはすめり。さるも、やむを得ざる心やりにやあらん」といへり。この「何事もおもほえず」は、哥よむころもなきをいふ。「心やり」は、「苦しき心を外へやる」にて、いま「氣晴し」といふに似たり。

ふねもいさでいたづらなれば、ある人のよめる

いそふりのよするいそにはとしつきをいつともわかぬゆきのみぞふる　このうたはつねにせぬ人のことなり。

あら波の打よする磯へには、いつを冬、いつを春など、さらに年月をわかぬ雪の降のみやまぬと也。立波の間なく時なきを、此日頃めなれ来て、いつもかゝりと、年月をさへきはめていへり。「船もいさでいたづらなれば、よめる」といへるをかけて聞べし。「いそふり」は、「磯觸」にて、荒波の名也。此ごろの大あれに、岸より高く砕る波の散のまがひを船中より見上たらんは、まことに雪のこゝちすべし。『頭書』に、『相模風土記』云、「鎌倉郡見越寄、毎有「速浪」崩「石」國人名号「伊曾布利」、謂「振」石也云々」といへり。此「いそふり」も、即ち土人のいふ名にて

荒浪をいふ證也。「謂<sup>レ</sup>振<sup>レ</sup>石也」とある名義の釋はとられず。後の哥に「いそふり」とよめるあれど、皆此記によりてよめる物也。さて、「此哥は、平生歌よみなどせぬ人の言也」といひて、「いそふり」など方言のまゝをいたはらず、聞なりによめるをことわれり。

また、ひとのよめる

風によるなみのいそにはうぐひすもはるもえしらぬ花のみぞさく

ふく風に波のよる磯へには、鶯はもとよりにて、春もしらざる花の咲わたると也。大やう、花は春の物にして、鶯の来なくが常なるに、こは、今その春ながら、春もよそにて鶯もとはぬ花ぞといふ。「花のみぞ」の「のみ」は、専ら下の「さく」といふにかゝりて、「咲のみさく」意也。上の哥の「雪のみぞ降」も、しきりに降ことをいひて、「雪ばかり」といふにあ「らざると全く同じ。

さて、二句「浪の磯には」とつゞけなしたる事いかゞ。風に波のよる磯にはと、打かへしてきく方にも、かなはざる調あり。『萬葉』にも、「白波乃濱松之枝<sup>シラナミノハマツカエ</sup>」とあり。これも、波より濱とつゞけたる、不審の事也。しばらく疑ひを残して、後勘をまつのみ。

このうたどもを、すこしよろしとききて、ふねのをさしけるおきな、つき<sup>四</sup>ごろ、くるしきころやり

によめる」

たつなみをゆきかはなかとふくかぜぞよせつゝひとをはかるべらなる

こは、上に、「かゝれども、苦しければ、何事もおもほえず」といへるを受たり。此けしきをば見ながら、さる哥よむ心もなかりしかど、此人々のよめるをきゝて、すこしおもしろく、なぐさむ心つきたる也。この「よろし」は「心よろしき」にて、屈したる心も引たてしをいふ。「此哥どもをきゝてすこしよろし云々」と、打かへして意得べし。前に、「人のわらふを聞て、心はすこしなぐさぬ」とあると同じ意ばへ也。「此哥どもの意を、よく聞なして」といふ意にみる事なかれ。歌のこゝろをよろしと聞て、くるしき心やりによめるといふことわりも、なき事也。「船のをさ」は、『抄』に、「船中のつかさする心也。紀氏をいふべし」といへり。「月ごろ苦しき心やり」は、上に、「苦しければ何事も云々」といへる、其「こゝろやり」也。さるは此哥」どもに催されて、おのれも歌こゝろになれるをいへり。さて、上に、「かゝれどもくるしければ」といへるは、次に「男どちは、心やりにやあらん」とうけたれば、かの女のいふと聞ゆるを、今は又「船のをさしける翁のくるしき心やり」と書る、其くるしむ人、前後男女のたがひあるに似たれど、いづれ紀氏み

づからいへるなれば、さばかりは、例のかへり見られざる也。「月ごろ」は、「日ごろ」のたがへるならん。前にも後にも「苦」しき」とあるは、此連日の苦心をいへるなれば、「日ごろ」となくては更にならず。「月ごろ」とはいふべからず。こは、「日」の字の「月」となだれたる也。哥の意、たつ白波を、吹しく風の、雪かとよせ花かとよせて、人を欺きはかるさま也といふ。「花かと」ゝいへる二句にて起る哥也。上に、「雪のみぞふる」、「花のみぞさく」と見まどひたる両首の哥の意をうけて、「雪と見せ、花と見せつゝ人をはかる」といへり。「よせつゝ」といへるは、「雪によせ」、「花によせ」の意あるべし。

このうたどもを人のなにかといふを、あるひと、きゝふけりてよめり。そのうた、よめるもじ、みそもじあまりなゝもじ。ひとみな、えあらでわらふやうなり。うたぬしいとけしきあしくて、えず。

「人のなにかといふ」とは、「何はしかぐ」、「かはしかぐ」とあげつらふ事にて、此哥どもは是非を評するをいふ。今も常にいふ語也。さて、其評を、又「ある人かたへに聞ふけり居て、「いぎ、おのれも」とよみ出たる也。「ふける」は「道にふける」、「色にふける」などの「ふける」にて、「物に深入する」をいふ也。きゝもてゆくまゝに、われを忘れておぼれぬるやうの意にて、歌



しらぬ身もよみつべう思ひなりたるをいふ。さて、其哥をきけば、よめる文字のかず三十七字也。  
人みな、そのをかしさをたへで、えあらずして吹も出べきやうすと也。是を見て、哥ぬし、「さ」  
ばかり嘲り給ふべきにはあらじ」と氣色せし也。「えず」は「怨<sup>モン</sup>ず」也。やがて「えんず」とも常  
にいひて、しふねくうらむるさま也。「怨」は、「うらみ」とよましむる字なれど、音のまゝにと  
なふれば、たゞ「うらむ」といふとは自然たがへる事也。たとへば、「歎ず」といひ、「念ず」と  
いへば、「なげく」といひ、「おもふ」といふとは意ばへ同じからざるが如し。こゝらにては、ふ  
つくみて不満のかたち也。『うつぼ』に、「ある時は、にくげに」えじ給ふ、『源氏』に、「女君も、  
今はことにえじ聞え給はず」、『枕草子』に「人もさはよかなりとえじて」などあり。  
まねべども、えまねばず。かけりとも、えよみすゑがたかるべし。けふだに、かくいひがたし。まし  
て、のちにはいかならん。

其哥のさま、まねびみれども、まねびえられず。又、よし、筆にかけりとも、誰も、よみ遂ん事  
かたかるべし。見きゝするけふだに、かく、いひときがたし。」況や、後に傳へて聞ん人は、いかゞ  
あらん。哥とも何とも、えわくまじきといふ。歌のわろきばかりの事を、かばかり誹謗せるもい

と可笑きに、すべておしつむれば、何のことわりもなく、手にもかゝらぬいみじき滑稽也。

十九日 日あしければ、ふねいださず。

きのふの如くあるをいふ。」

奈良女子大学プロジェクト経費  
『土左日記創見』の基礎研究」報告  
『土左日記創見』翻刻

平成十九年三月三十日 発行

印刷 株式会社 新踏社  
奈良市鍋屋町一九一